

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第25集

東 田 遺 跡

1995年3月

豊橋市教育委員会
豊橋遺跡調査会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第25集

あづま だ 東 田 遺 跡

1995年3月

豊橋市教育委員会
豊橋遺跡調査会

例　　言

1. 本書は、豊橋市東田町87番地の豊橋競輪場メインスタンド建設に伴い実施された埋蔵文化財調査の報告書である。調査期間は、平成7年1月5日～1月18日である。
2. 調査は豊橋市役所競輪事業課が豊橋遺跡調査会に委託して行い、岩瀬彰利（文化振興課文化財係）が調査指導に当たった。
3. 報告書作成にあたり、遺物・遺構等の実測・拓本・トレース等については、多田美香、副島さや子、山本絢子、氏原久枝各氏の援助を受けた。また、写真撮影は岩瀬が行った。
4. 発掘調査に際しては事業者である競輪事業課より調査費用等の援助を受けた。発掘作業、整理作業については、地元の方々の御協力を得ることができた。記して感謝の意を表す次第である。
5. 調査区の設定は任意であるが、建設省告示に定められた平面直角座標第VII系に準拠した座標を示した。基準杭の設置、遺構の測量及び上空からの写真撮影については、（株）フジヤマに委託して行った。
6. 本書の執筆・編集は岩瀬彰利が行った。
7. 遺物・遺構のスケールについてはそれぞれに明示した。なお、写真の縮尺は任意である。
8. 本調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録、出土遺物は豊橋市教育委員会において保管している。

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地	1
2. 歴史的環境	4

第2章 調査の経過

7

第3章 遺構

1. 壇穴住居址	10
2. 掘立柱建物址	12
3. 溝	14
4. 土壙等	15

第4章 遺物

20

第5章 まとめ

24

挿図目次

第1図 東田遺跡位置図 (1/50,000)	2
第2図 東田遺跡周辺地図—明治32年— (1/50,000)	3
第3図 東田遺跡周辺地形復元図 (1/5,000)	3
第4図 東田遺跡周辺主要遺跡分布図 (1/10,000)	5
第5図 試掘調査トレンチ位置図 (1/500)	7
第6図 本調査区位置図 (1/2,500)	8
第7図 調査区全体図 (1/100)	9
第8図 竪穴住居址平面図・断面図 (1/60)	11
第9図 掘立柱建物址平面図・断面図 (1/40)	13
第10図 SD-1 平面図・断面図 (1/80)	14
第11図 SK 平面図・断面図 (1/40)	16
第12図 SX 平面図・断面図 (1/60)	18
第13図 遺物出土状況図 (1/80・1/20)	19
第14図 出土遺物実測図 (1/3)	22

表目次

第1表 遺跡地名表	6
第2表 出土遺物観察表	23

写真図版目次

図版1 東田遺跡調査区全景（直上から）

2-1 SB-1 全景（東から）	2 SB-2 全景（直上から）
3-1 SB-1 遺物出土状況（北から）	2 SB-1 須恵器（3）出土状況（北から）
3 SB-1 須恵器（1）出土状況（北から）	4 SB-1 土師器（8）出土状況（北から）
5 SB-2 遺物出土状況（北西から）	
4-1 SB-3・4 全景（直上から）	2 SD-1 全景（西から）
5-1 SX-1 全景（南西から）	2 SX-2 全景（西から）
6-1 SK-1 遺物出土状況（西から）	2 SK-7（北から）
3 SK-8（西から）	4 SK-14・15（西から）
5 SP-1（西から）	5 SP-2（西から）
7 出土遺物	

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

東田遺跡は豊橋市東田町の豊橋競輪場一帯に所在する遺跡である（第1図）。豊橋市は東を弓張山地、南を太平洋、西を三河湾にそれぞれ面し、平野部が限られている。市域北側は一級河川である豊川が三河湾に向かって西流し、市域の大半は豊川と現在浜松市を貫流する天竜川の前身である古天竜川によって造られた河岸段丘上に位置している。河岸段丘は高位面（天伯原面・標高30～60m）、中位面（高師原面・豊橋上位面・標高15～30m）、低位面（豊橋面・標高4～10m）の大きく3面に分けることができる。

東田遺跡の所在する東田地区は豊川左岸の河岸段丘・豊橋上位面にあり、北方を朝倉川が流れている。朝倉川はこの地区の東方約4kmの多米地区の山地に源を発し、この段丘を開析して大きく分割しながら豊川に注ぐ小河川である。

東田遺跡は朝倉川を望む台地北部中央付近に位置し、標高14m前後を測る。この台地は標高約20mを頂点に北方は朝倉川に向かって緩やかに傾斜し、標高15m付近で比較的フラットに広がり張り出している。朝倉川はこの部分を迂回するように湾曲しながら流れる。

遺跡周辺は、現在は競輪場や野球場などのスポーツ施設が造られ、周辺には住宅が密集し旧地形が把握し難いぐらい開発されているが、明治32年の古地図（第2図）が示すように競輪場が造られる以前は集落が殆どなく、雑木林が繁り小川によって開析された台地であったようである。今回調査した地点は標高20m程の段丘高位面から一段降りた標高15m前後の比較的平坦な台地西の縁部に位置している（第3図）。調査地点のすぐ西は、開析された小規模な谷が朝倉川に向かって進んでいる。調査区内では台地が北西方向に緩やかに傾斜しており、台地縁部に位置することを示している。

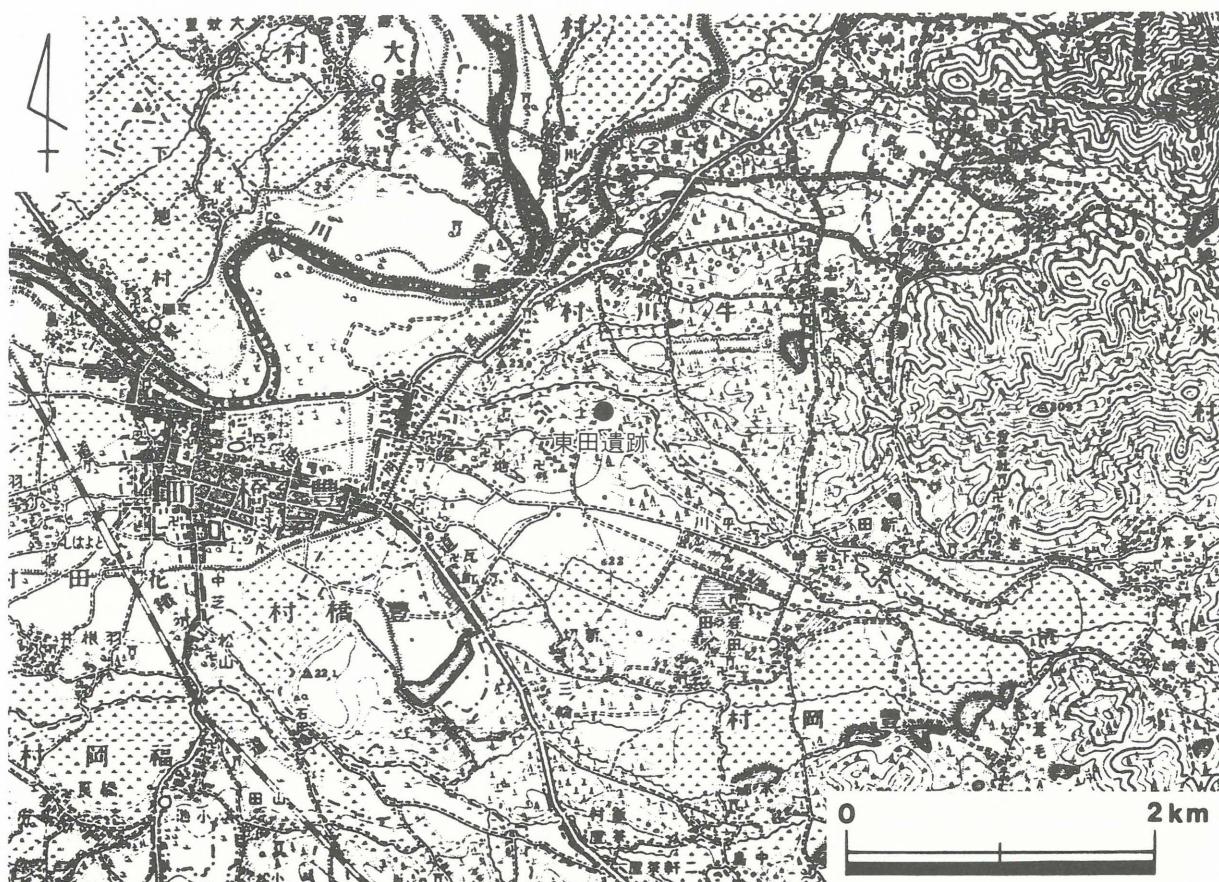
集落は調査地点から東側の平坦面を中心に形成されていたと考えられ、集落が形成された古墳時代は、朝倉川に接した水の補給の容易な自然条件のよい立地であったことが想定される。また、段丘最高位ではなく一段下がった朝倉川に接する台地上に所在するため、船等の発着が容易であり交通に便利な地区であったといえよう。このように、遺跡の立地条件は災害面と交通・生活面において良好なものであったことが想定される。

参考文献

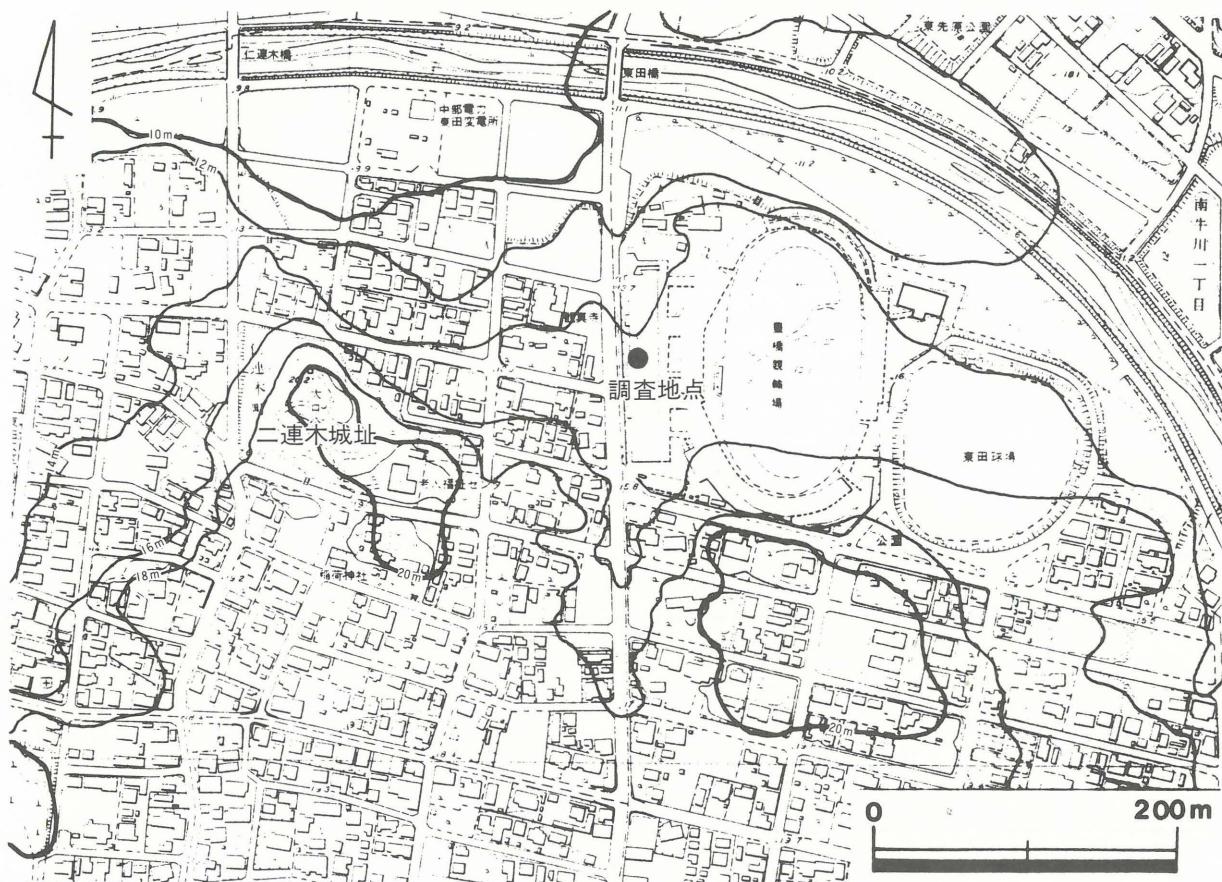
- 豊橋市史編集委員会 『豊橋市史』 第1巻 1973
豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 水神古窯』 1987
豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第10集 桜遺跡試掘調査報告書』 1989
豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第11集 見丁塚遺跡』 1990
豊橋市教育委員会他 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第23集 熊野遺跡』 1995



第1図 東田遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 東田遺跡周辺地図—明治32年—(1/50,000)



第3図 東田遺跡周辺地形復元図 (1/5,000)

2. 歴史的環境

東田遺跡は古くからその所在が知られており（註1）、東田遺跡の所在する東田地区は遺跡の多い地域である。ここでは東田地区及び朝倉川を挟んだ対岸の牛川地区の主要な遺跡の概要を紹介する（第4図）。

縄文時代は、小規模な遺跡が多く知られ土器や石器等が採集されているが、遺構は殆ど検出されていない。これらの遺跡のうち、おいほて遺跡（17）、眼鏡下池北遺跡（29）、浪ノ上遺跡（33）からは縄文時代早期の神宮寺式併行の押型文土器が出土している。特に浪ノ上遺跡では、1982年の発掘において押型文期の竪穴住居址1軒と平地式住居址6・7軒が検出されたそうであるが詳細は不明である。この他にも西側北遺跡（22）からは前期中葉の北白川下層II式等が出土し、洗島遺跡（19）からは中期中葉の北屋敷式を中心とした土器と石器が出土している。また晩期になると熊野遺跡（28）等から条痕文土器の破片が少量であるが出土し、台地縁辺部を移動していたようである。

弥生時代では、浪ノ上遺跡をはじめ、西側遺跡（22）、東田遺跡（1）等多くの遺跡が見つかっている。このうち浪ノ上遺跡からは後期の欠山式期の竪穴住居址が多数検出されており、大規模な集落であったものと思われる。西側遺跡からは試掘調査によって弥生時代中期～古墳時代中期の土器等が出土しているが、住居址等の遺構は検出されていない。しかし、弥生時代後期のハマグリ主体の小貝塚を伴っていることが確認されている。東田遺跡からは今回の調査では出土していないが、以前に中期の弥生土器（長床式）と土壙が検出されたことが知られている。

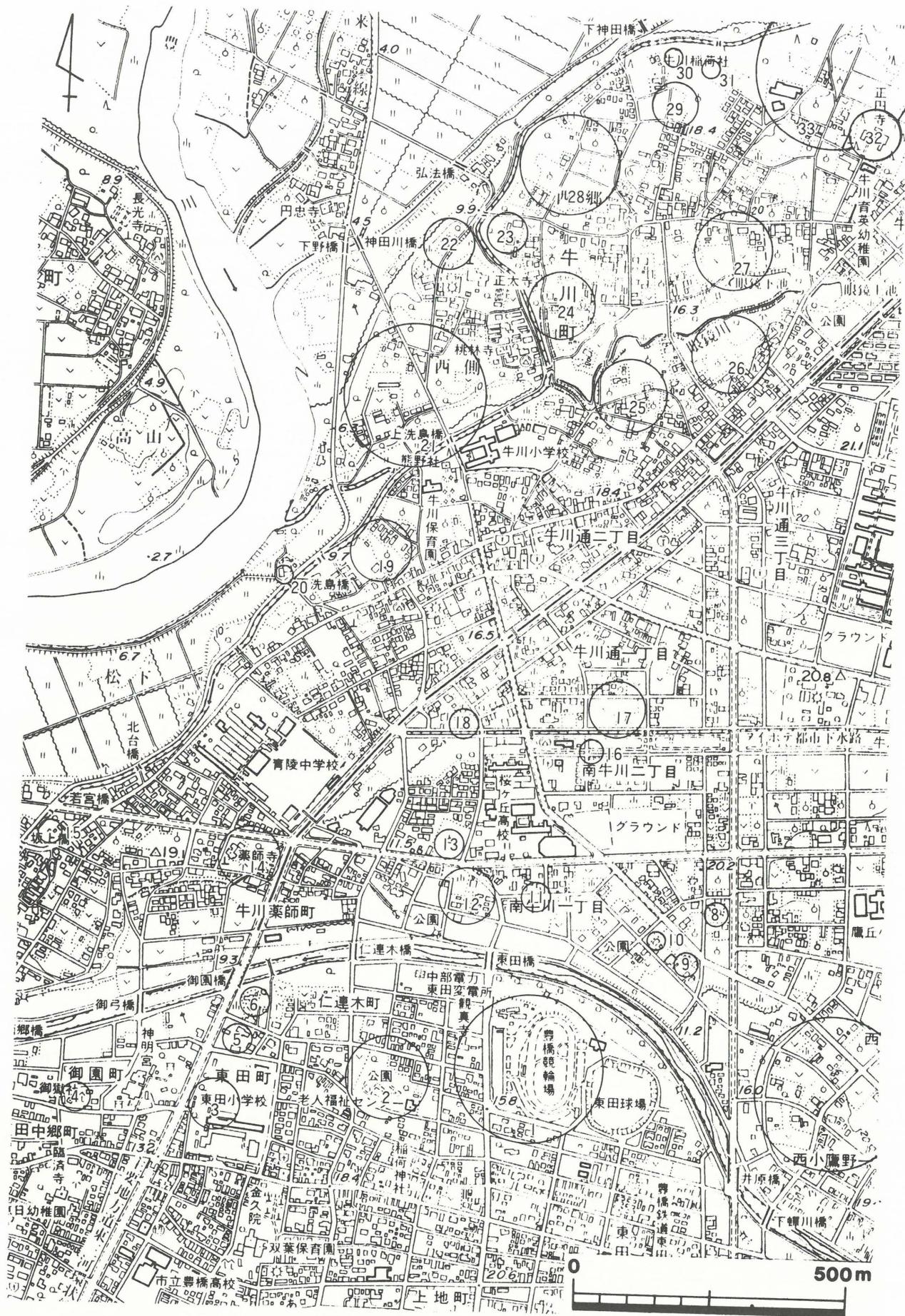
古墳時代は、集落址では今回調査した東田遺跡や浪ノ上遺跡、西側遺跡、西先原遺跡（11）、西小鷹野遺跡（7）等がある。大半の遺跡は弥生時代から継続する遺跡であるが、西小鷹野遺跡は古墳時代のみの散布地として知られている。

古墳では中期以降のものが見つかっており、東田古墳（4）、稻荷山1号墳（30）、稻荷山2号墳（31）等が知られている。東田古墳は中期の前方後円墳で、全長40mを測る。後円部からは鳥文鏡や直刀が出土し、墳丘上からは埴輪が出土している。豊川左岸では中期の前方後円墳が殆ど見つかっておらず、東田古墳はこの地域の首長墳であるものと推定される。稻荷山1・2号墳は中期墳の方墳と考えられ、おそらく群集墳を形成していたものと思われる。

古代以降では、集落址、古墓址、古窯址、城址等がみられる。古代の遺跡には西先原遺跡があり、奈良時代の道路状遺構や柵列が検出されている。この地区の集落址は、調査によって様相が判明したものは少なく遺物が出土しているだけの例が多いが、熊野遺跡は調査によって中世の掘立柱建物址がまとまって検出された好例である。

古墓址では、西側古墓群（23）が知られている。西側古墓群は、調査で常滑焼の蔵骨器と礫等の埋納遺構が検出されている。

古窯址では、牛川焼窯址（20）が存在している。牛川焼窯址は江戸時代に陶器（牛川焼）を焼いた窯であるが、調査されていないため詳細は不明な点が多い。



第4図 東田遺跡周辺部主要遺跡分布図 (1/10,000)

城址では、戸田氏の居城である二連木城址（2）や浪之上古屋敷跡（32）が知られている。二連木城址は現在は大口公園となっており、土壘や空堀が残存している。浪之上古屋敷跡は戸田氏の館址といわれているが、遺構が残っておらず、現在は寺院や宅地になっている。

第1表 遺跡地名表

	遺 跡 名	時 期		遺 跡 名	時 期
1	東田遺跡	弥生・古墳・中世	18	牛川北遺跡	中世・近世
2	二連木城址	中世	19	洗島遺跡	縄文・古墳・中世
3	東郷遺跡	弥生	20	牛川焼窯址	近世
4	東田古墳	古墳	21	西側遺跡	弥生・古墳・中世
5	仁連木西遺跡	中世・近世	22	西側北遺跡	縄文～古墳・古代
6	仁連木遺跡	弥生	23	西側古墓群	中世
7	西小鷹野遺跡	古墳	24	東側遺跡	古代～近世
8	もぐら沢遺跡	中世・近世	25	中郷西遺跡	中世・近世
9	南牛川C遺跡	縄文	26	中郷遺跡	中世・近世
10	東先原遺跡	縄文	27	眼鏡池北遺跡	縄文・弥生・古代
11	西先原遺跡	縄文・弥生・古代	28	熊野遺跡	縄文～古墳・中世
12	南牛川A遺跡	中世・近世	29	稻荷前遺跡	縄文・弥生
13	南牛川D遺跡	弥生	30	稻荷山1号墳	古墳
14	薬師寺遺跡	中世・近世	31	稻荷山2号墳	古墳
15	薬師遺跡	縄文	32	浪之上古屋敷跡	中世
16	牛川B遺跡	古墳	33	浪ノ上遺跡	縄文～古墳
17	おいほて遺跡	縄文・弥生			

註1 東田遺跡は『愛知県八名郡の先史遺跡』で東郷遺跡と呼ばれている遺跡と同一のものである。

東田遺跡の西500mの東田町字東郷には東郷遺跡と呼ばれる別の弥生時代の遺跡が存在することから、混乱を避けるために豊橋市教育委員会では競輪場周辺の遺跡を東田遺跡と呼称して区別している。

参考文献

木下克己 『愛知県八名郡の先史遺跡』 1975

愛知大学考古学研究会 『発掘速報掘るじゃん』 第3号 1982

豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集』 1982

豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第12集 牛川西部地区遺跡範囲確認調査報告書』 1991

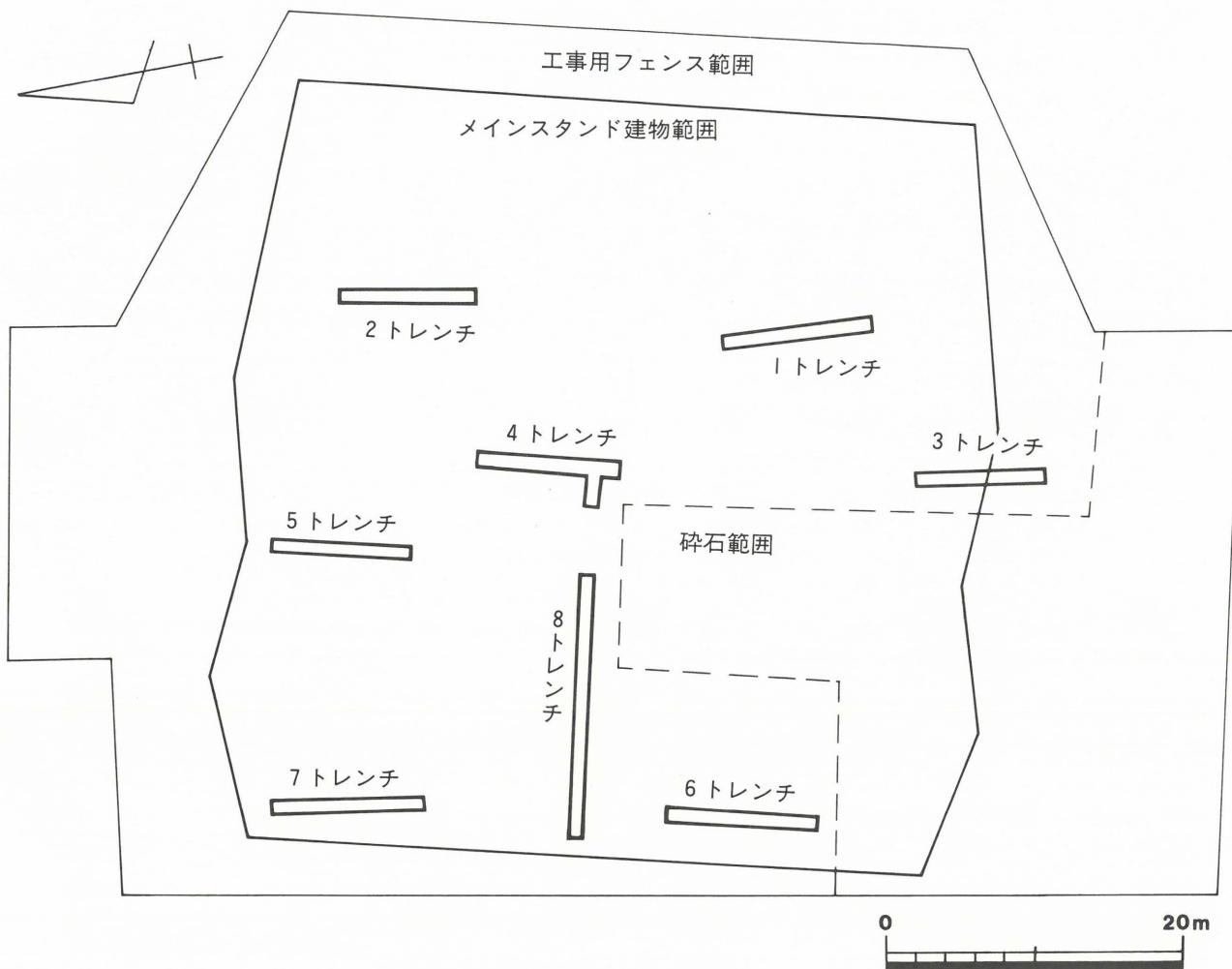
豊橋市教育委員会他 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第23集 熊野遺跡』 1995

第2章 調査の経過

豊橋市東田町字87番地に所在する豊橋競輪場では、施設の老朽化により観客の安全が確保できなくなつたためメインスタンドの改築及び場内の環境整備を行うこととなつた。このため、平成6年度はメインスタンドを改築し平成8年5月に完成予定、以下、順次各施設を改築する計画であった。

この計画を基に競輪場を運営する豊橋市商工部競輪事業課から、建築確認申請の合議が市教育委員会文化振興課に提出された。教育委員会では、現地が東田遺跡の範囲に含まれる可能性が高いことから、当教育委員会と競輪事業課の2者で協議し、試掘調査を行い埋蔵文化財の所在の有無を事前に確認することに決定した。

試掘調査は既存スタンド撤去後の平成7年1月5日に、メインスタンド建設範囲内を対象にトレンチを設定して行った（第5図）。試掘調査に際してはメインスタンド工事業者から重機の提供を受け2日間で行った。トレンチは幅1m、長さ10mを基本に当初7ヶ所に設定した。調査の結果、1～5トレンチは旧メインスタンド等の建物によって地山面が破壊されており、埋土中からも遺物等は出土しなかつた。ところが、6トレンチは南半分が破壊されていたものの、北半分は地山面が良好に残つており土壙等の遺構も確認されたうえ、遺物も古墳時代の土師器片が出土した。一方、7トレンチか

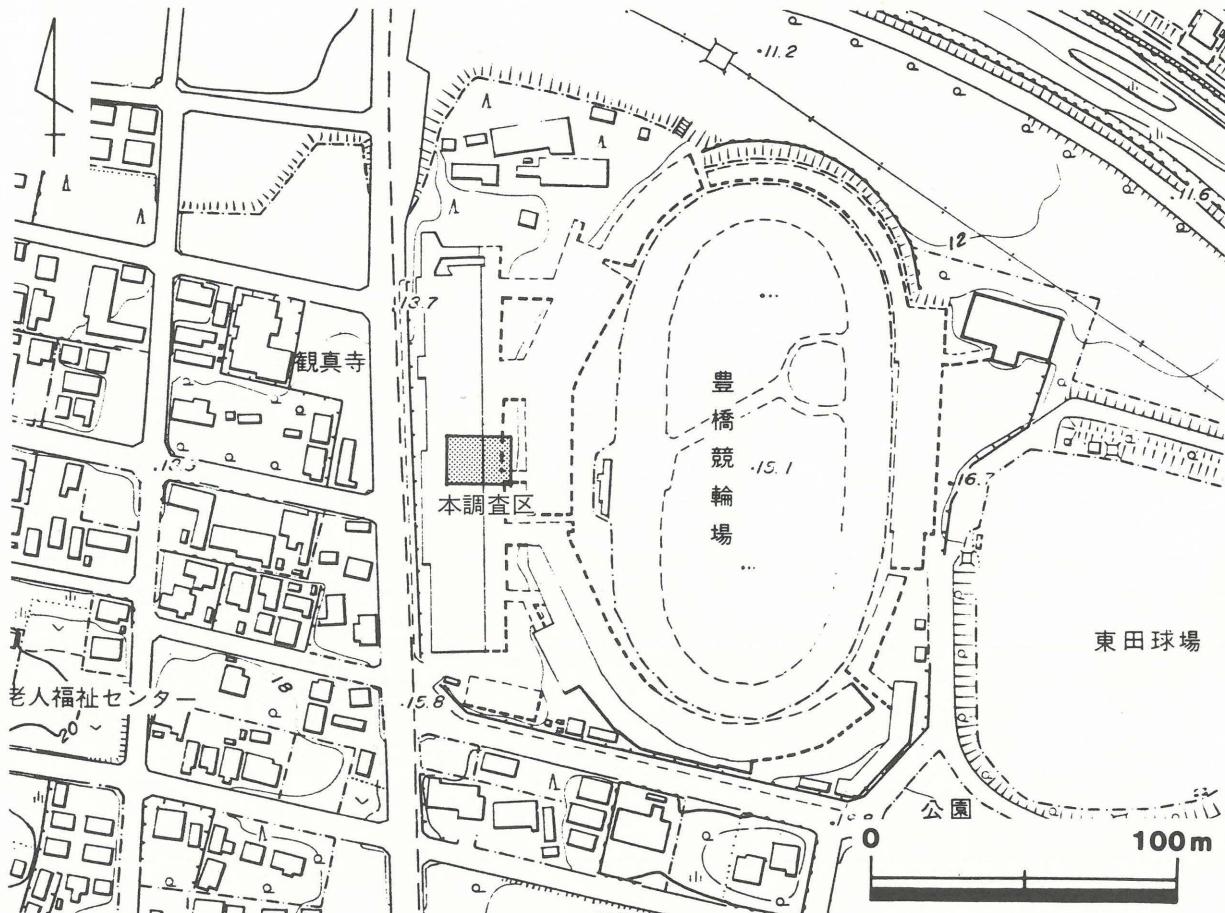


第5図 試掘調査トレンチ位置図 (1/500)

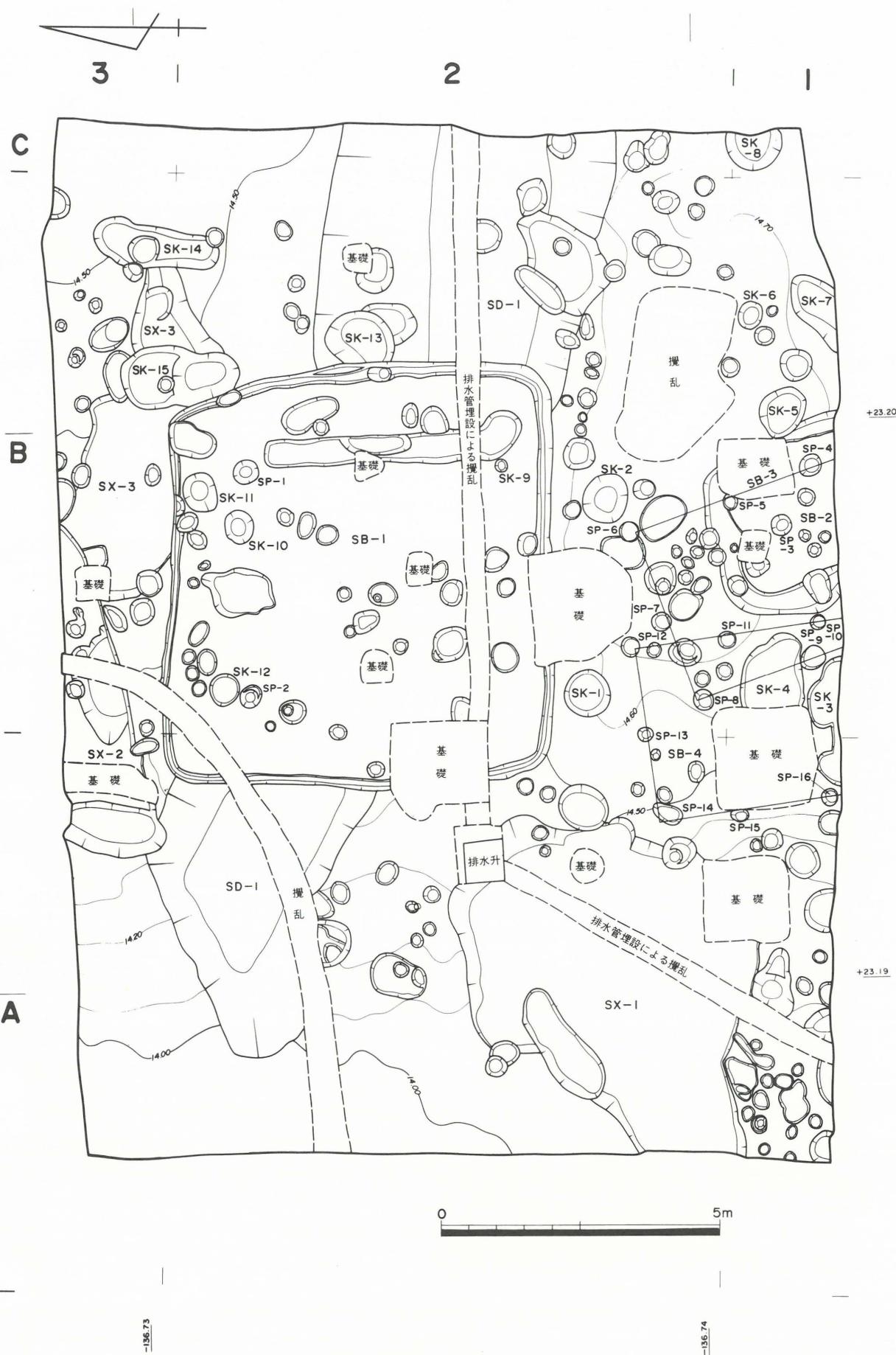
らは土師器片が僅かに出土したが、遺構が存在した可能性のある地山面は破壊されていた。このために地山面の残存状況及び遺構の存在を確認するため、新たに8`トレンチを設定し、4`トレンチも西側に2m程拡張した。4`トレンチの拡張区からは遺構・遺物は出土せず、地山面も大半が破壊されていたが、8`トレンチからは広範囲に渡る埋土（調査後竪穴住居址の埋土と判明）と土壙、6世紀代の須恵器及び土師器が出土し、6`トレンチの北側半分と8`トレンチ付近には遺構・遺物が比較的良好に残存していることが確認された。

この結果をふまえて市教育委員会と事業者である競輪事業課で再協議し、旧スタンド等の建築物で破壊されておらず、遺構・遺物の残存している6`トレンチの北側部分と8`トレンチを含めた部分を中心に約250m²について発掘調査を行うことで合意した。発掘調査は豊橋市教育委員会から依頼を受けた豊橋遺跡調査会を行い、調査費用は事業者が全額負担することになった。また工事期間に配慮して、航空測量等を利用するなど期間短縮に努めた。

本調査は平成7年1月9日～1月18日にかけて行った。調査区の位置は第6図の通りである。本調査は調査区に任意の基準点を設定し、10m×10mのグリッドを基本にして調査区を区割りし、表土等の遺物はグリッド単位で取り上げた。調査の結果、古墳時代後期の竪穴住居址2軒と中世の掘立柱建物址2棟及び幅4m程の浅い溝等が検出された。このうち、竪穴住居址1軒は1辺が7m程の大型なもので、平面形は方形であった。遺構は多く検出されたが遺物の出土量は極めて少なく、試掘・本調査合わせてもコンテナ1箱にも満たなかった。



第6図 本調査区位置図 (1/2,500)



第7図 調査区全体図 (1/100)

第3章 遺構

今回の調査では竪穴住居址、掘立柱建物址、溝、土壙等の遺構が検出されている（第7図）。ここでは各遺構を種類毎に説明し、土壙に関しては遺物の出土したものを中心に記載する。記載にあたって竪穴住居址・掘立柱建物址はSB、溝はSD、土壙はSK、性格不明の土壙はSX、建物等の柱穴はSPとそれぞれ表記する。なお、SB-1・2は竪穴住居址、SB-3・4は掘立柱建物址であり、規模等の数値は検出面で測った数値である。

1. 竪穴住居址（第8図）

SB-1

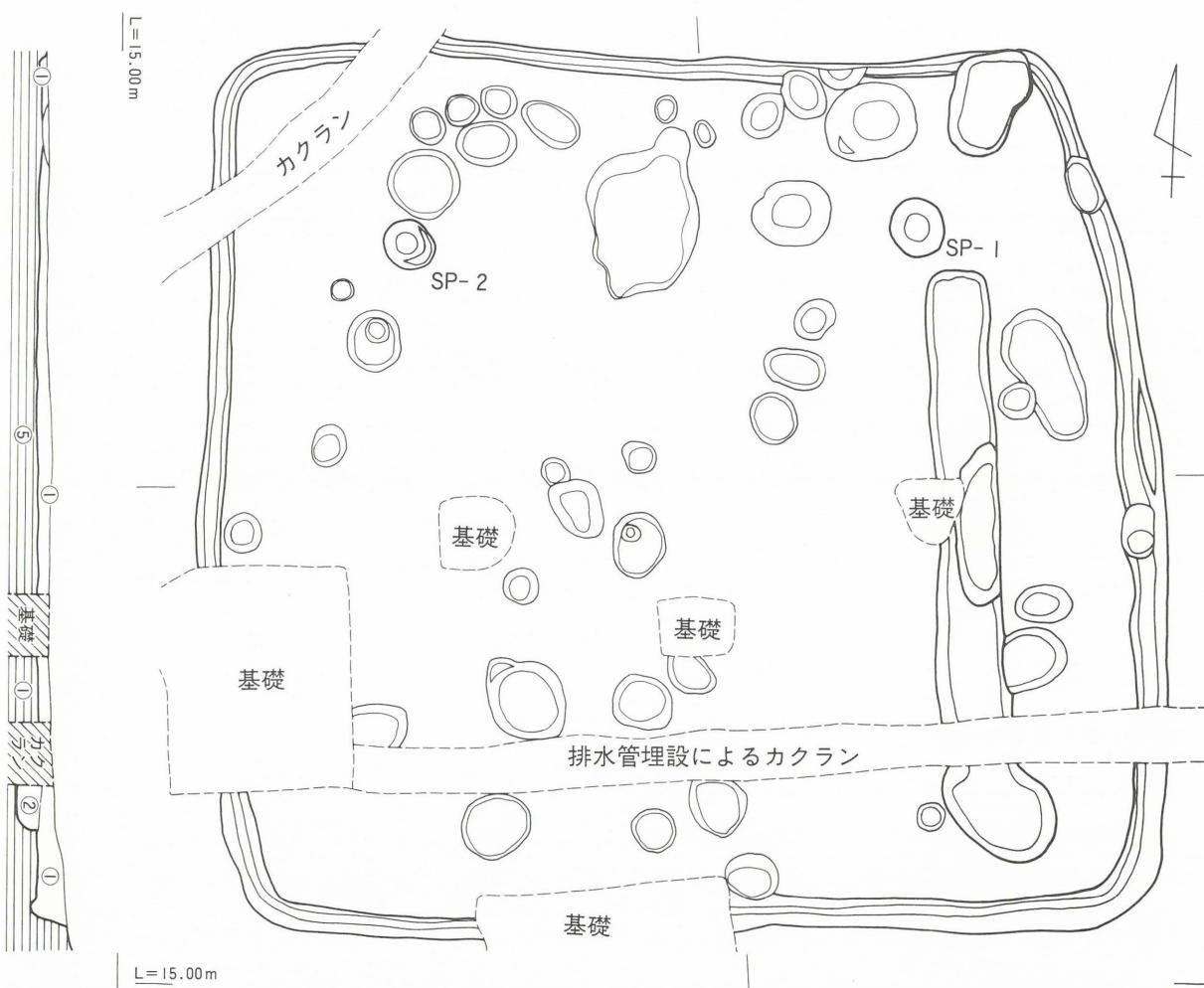
SB-1は7.68m×7.05mの竪穴住居址であり、部分的に建物基礎や排水管等によって壊されているが比較的良好に残存している。住居址の平面形は方形をなし、主軸方位はN-2°-Wを測る。住居址の壁際には幅25cm、床面からの深さが約5~10cmの壁溝が巡らされており、床面は地山面から24cm（最大値）の深さで掘り込まれている。柱穴は4主柱穴のタイプと思われ北側の2ヵ所で確認されたが、南側の2ヵ所は排水管によって破壊されていた。SP-1はコーナー部より内側に1.68mの位置にあり、直径45cmの円形で床面からの深さは54cmを測る。SP-2はコーナー部より内側に1.95mの位置にあり、直径36cmの円形を呈し、床面からの深さは33cmを測る。柱間はSP-1とSP-2の間が4.08mである。

竈は破壊されていたが、住居址の北辺中央部付近に多量の焼土が検出でき、この付近に竈が存在していたものと思われる。住居址東側の壁溝より約1mの位置に幅55cm、長さ4.74m、深さ17cm（最大値21cm）の溝が検出されているが、性格は不明である。遺物は6世紀末~7世紀初頭の須恵器（坏身・坏蓋・提瓶・盤）、土師器（台付甕・壺・高坏）が出土している。

SB-2

SB-2は2.7m×2.55m以上の竪穴住居址であり、住居址の南半分は調査区外で完掘されておらず、また建物基礎によって部分的に破壊されているが、平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形をなすものと思われる。主軸方位はN-31°-Wを測る。住居址の壁際には幅約39cm、床面からの深さが約2~22cmの壁溝が巡らされており、床面は地山面から約10~13cmの深さで掘り込まれている。壁溝中には同時期に存在したと思われる土壙もみられた。柱穴は2主柱穴のタイプと思われるが1ヶ所のみ確認されている。SP-3は直径36cmの円形を呈し、床面からの深さは27cmを測る。

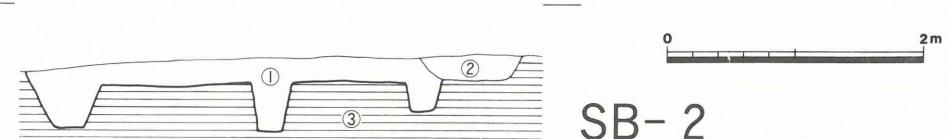
住居址からは竈は検出されず焼土も確認されないため、竈は調査区外に存在しているものと思われる。遺物は須恵器（坏身）や土師器が出土している。



SB- 1

- SB- 1**
- ① 暗灰褐色砂質土層
 - ② 暗褐色砂質土層
 - ③ 赤褐色砂質土層(焼土まぎり)
 - ④ 暗灰褐色砂礫層
 - ⑤ 淡灰色粘質土層(地山)

- SB- 2**
- ① 暗褐色砂質土層
 - ② 暗灰褐色砂質土層
 - ③ 淡灰色粘質土層(地山)



第8図 積穴住居址平面図・断面図 (1/60)

2. 掘立柱建物址 (第9図)

S B - 3

S B - 3 は 2 間 × 3 間以上の掘立柱建物になるものと思われるが、建物南側は調査区外に続いているため正確な規模は不明である。建物の主軸方位は N - 20° - W である。桁行は 3.46m 以上を測る。各柱間の長さは S P - 4 ~ S P - 5 が 1.60m、S P - 5 ~ S P - 6 が 1.90m、S P - 8 ~ S P - 9 が 2.10m である。

梁間は S P - 6 ~ S P - 8 が 3.30m を測る。各柱間の長さは、S P - 6 ~ S P - 7 が 1.72m、S P - 7 ~ S P - 8 が 1.60m である。

各柱穴の規模等は次の通りである。S P - 4 は最大径 42cm の円形をなし、深さは 32cm を測る。S P - 5 は最大径 24cm の円形をなし、深さは 27cm を測る。S P - 6 は最大径 36cm の円形をなし、深さは 48cm を測る。S P - 7 は最大径 32cm の円形をなし、深さは 53cm を測る。S P - 8 は最大径 40cm の円形をなし、深さは 48cm を測る。S P - 9 は最大径 48cm の楕円形をなし、深さは 27cm を測る。各柱穴からは遺物は出土していないため、建物の時期は不明であるが、S B - 4 と規模等が類似しているため同様な時期と思われる。

S B - 4

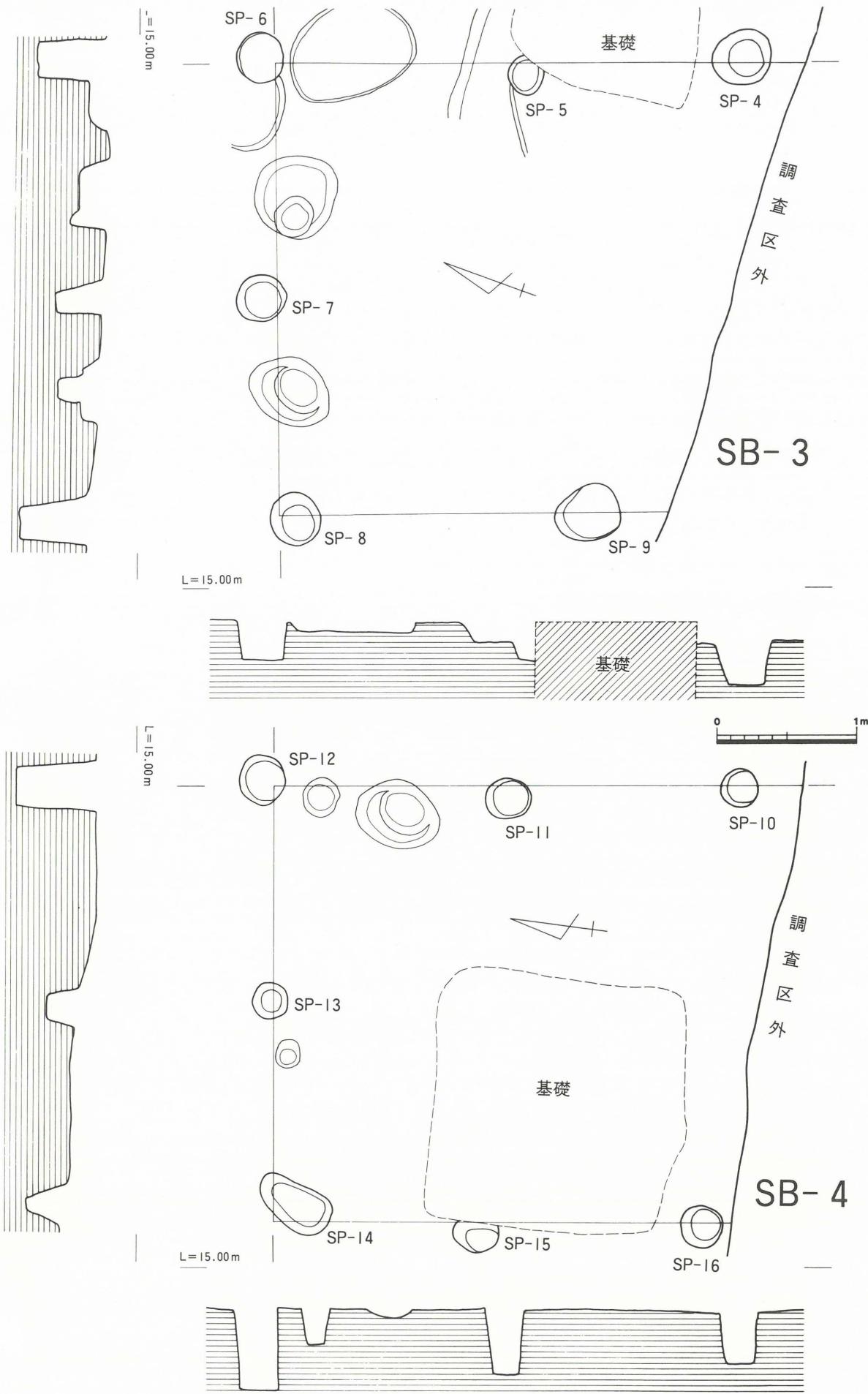
S B - 4 は 2 間 × 3 間以上の建物になるものと思われるが、建物南側は S B - 3 と同様、調査区外に続くため正確な規模は分からぬ。建物の主軸方位は N - 9° - W を測る。桁行は 3.44m 以上を測る。各柱間の長さは S P - 10 ~ S P - 11 が 1.72m、S P - 11 ~ S P - 12 が 1.90m、S P - 14 ~ S P - 15 が 1.36m、S P - 15 ~ S P - 16 は 1.64m をそれぞれ測る。

梁間は S P - 12 ~ S P - 14 が 3.04m である。各柱間の長さは、S P - 12 ~ S P - 13 が 1.56m、S P - 13 ~ S P - 14 が 1.48m である。

各柱穴の規模等は次の通りである。S P - 10 は最大径 26cm の円形をなし、深さは 36cm を測る。S P - 11 は最大径 32cm の円形をなし、深さは 47cm を測る。S P - 12 は最大径 32cm の円形をなし、深さは 59cm を測る。S P - 13 は最大径 26cm の円形をなし、深さは 22cm を測る。S P - 14 は最大径 58cm の楕円形をなし、深さは 28cm を測る。S P - 15 は一部建物基礎によって破壊されているが、最大径 32cm の楕円形をなすものと思われ、深さは地山から 30cm を測る。S P - 16 は最大径 30cm の円形をなし、深さは 20cm を測る。

各柱穴のうち S P - 11 からは遺物が出土しているが、他からは出土していない。S P - 11 からは中世陶器・碗の口縁部と土師器片が出土しており、建物は中世に建てられていたと思われる。しかし、出土遺物が口縁部破片 1 点のみであるため、詳細な時期に比定するのは困難である。

S B - 3 ・ S B - 4 は規模も類似し、位置もほぼ同一地点に建てられていることから、建て替えられた建物で、建物の時間差は殆どないものと思われる。ただ、どちらが先行するものかは、全く分からぬ。



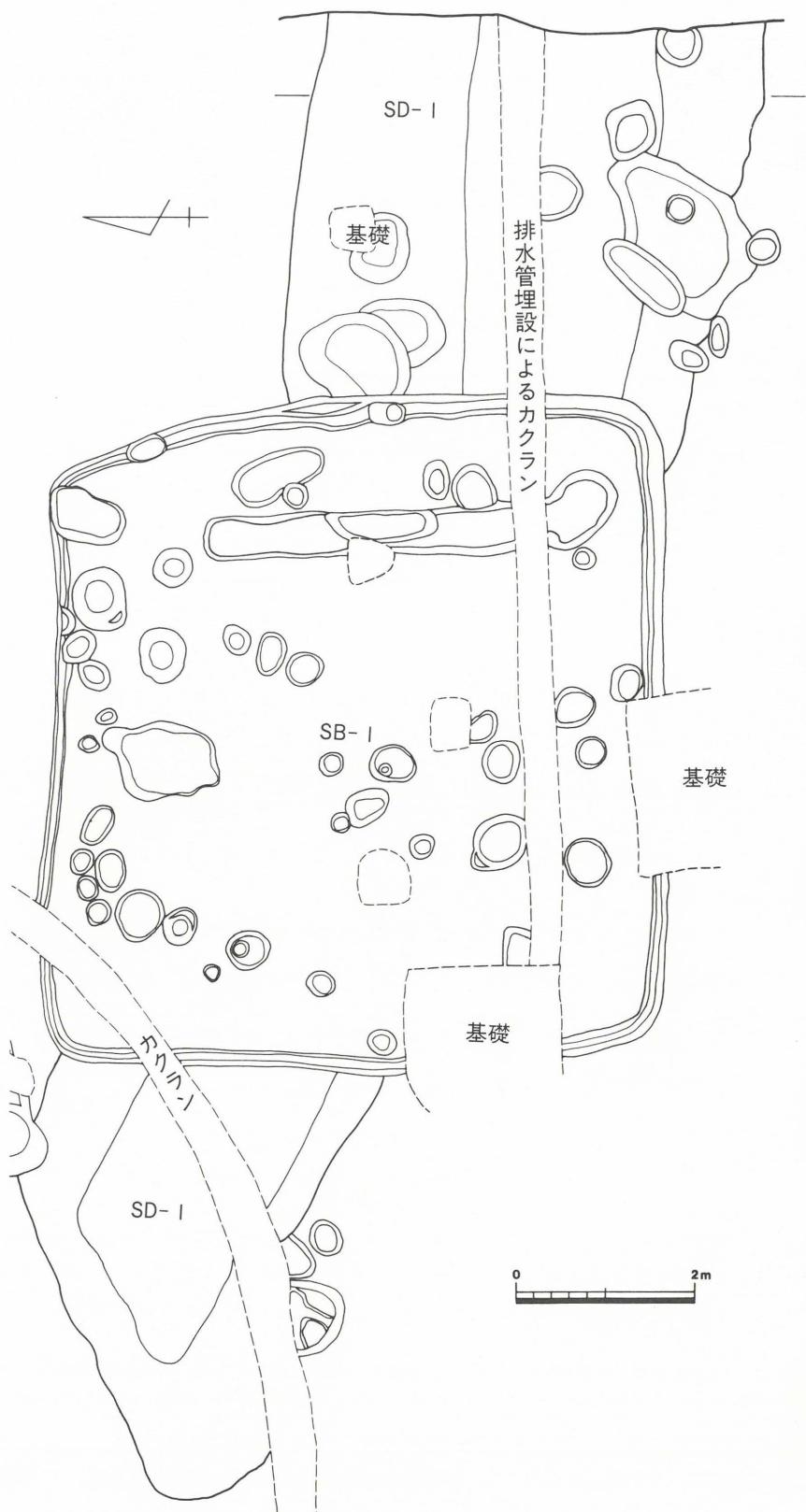
第9図 掘立柱建物址平面図・断面図 (1/40)

3. 溝 (第10図)

SD-1

SD-1は検出部の中央付近がSB-1で破壊されており、またカクランが中央を通るというように遺存状況は良くない。溝の検出面での規模は、最大幅5.04m、深さ18cmと非常に浅く、傾斜角約10°というように緩やかに落ち込んでいる。調査区で確認された溝は台地端部に向かって東西方向に伸び、調査区西側で終息する。終息する溝西側部分は検出面での幅約3m、深さ約30cmを測り、末端部では若干細く、深くなっている。溝の検出できた長さは約17mである。溝内に堆積した埋土は基本的に1層（赤褐色砂質土）であった。

遺物は殆ど出土していないが、僅かに須恵器・土師器の各1片がみられた。しかし、細片のため遺物からの時期は不明である。SB-1との切り合いから考えて6世紀後半以前の古墳時代に掘られたものと思われる。



第10図 SD-1 平面図・断面図 (1/80)

4. 土壙等 (第11・12図)

遺構には、土壙 (SK) と性格不明な遺構 (SX) 、柱穴 (SP) がみられる。SPについては前記したので割愛し、ここでは遺物の出土した土壙を中心に述べる。

SK-1 (第11図)

径86cmの円形をなし、深さは30cmを測る。12世紀末葉～13世紀前葉の中世陶器・碗と須恵器・坏蓋が出土している。

SK-2 (第11図)

径86cmの円形をなし、深さは39cmを測る。中世陶器・碗口縁部破片と奈良時代頃の須恵器・坏蓋破片が出土している。

SK-3 (第11図)

長径2.3m、短径58cm以上の双円形をなし、深さは27cmを測る。土師器片が出土している。

SK-4 (第11図)

長径1.24m以上、短径1.14mの楕円形をなし、深さは33cmを測る。土壙西側は基礎によって破壊されている。土師器片と中世陶器・碗片が出土している。

SK-5 (第11図)

長径94cm、短径7.8cmの楕円形をなし、深さは13cmを測る。土師器片が出土している。

SK-6 (第11図)

長径50cm、短径42cmの楕円形をなし、深さは16cmを測る。遺物は出土していない。

SK-7 (第11図)

長径94cm以上、短径80cmの長円形をなし、深さは51cmを測る。南側は調査区外である。遺物は出土していない。

SK-8 (第11図)

径1.02mの円形をなすものと思われ、深さは5cmを測る。東側は調査区外である。遺物は出土していない。

SK-9 (第11図)

径23cmの円形をなし、深さは17cmを測る。須恵器片が出土している。

SK-10 (第11図)

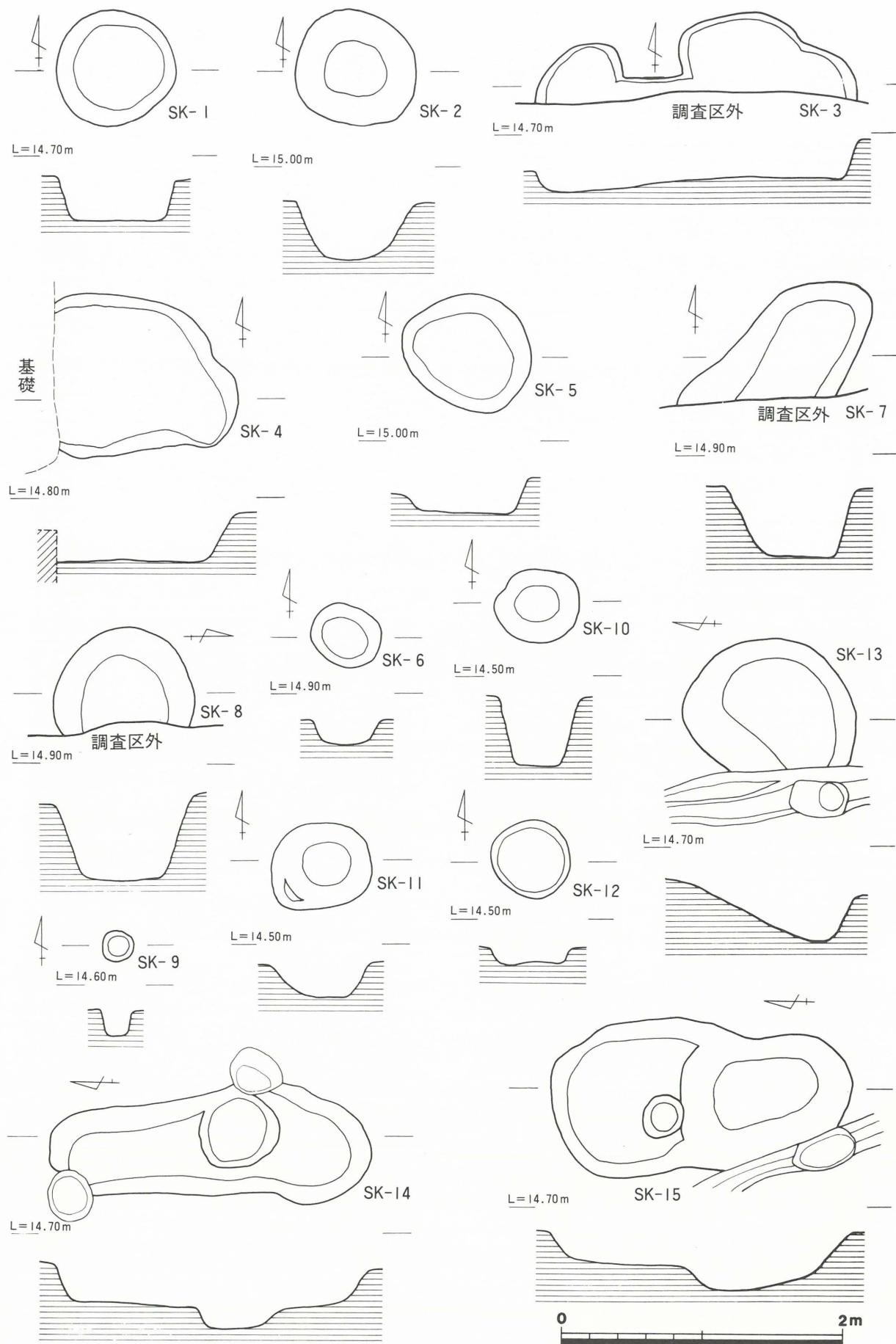
長径61cm、短径52cmの楕円形をなし、深さは54cmを測る。土師器の甌・把手部が出土している。

SK-11 (第11図)

長径72cm、短径60cmの楕円形をなし、深さは33cmを測る。土師器・壺口縁部と中世陶器・碗片が出土している。

SK-12 (第11図)

径56cmの円形をなし、深さは10cmを測る。土師器片が出土している。



第11図 SK平面図・断面図 (1/40)

S K - 13 (第11図)

長径1.28m、短径1.04mの楕円形をなし、深さは39cmを測る。西側は竪穴住居址によって壊されている。遺物は出土していない。

S K - 14 (第11図)

長径2.32m、短径65cmの楕円形をなし、深さは30cmを測る。底部に更に径58cmの円形土壙（深さ16cm）がみられる。遺物は出土していない。

S K - 15 (第11図)

長径2.28m、短径1.02mの楕円形をなし、北側と南側で段差をなす。深さは北側が11cm、南側が60cmで、北側には径30cmの円形土壙（深さ31cm）がある。南西部はS B - 1 に壊されている。遺物は出土していない。

S X - 1 (第12図)

長径4.7m以上、短径2.86mの不定形をなし、深さは最大で45cmを測る。遺構内には排水管や排水升、建物基礎等が造られているが、残存状況は比較的良好。遺構の掘り方は比較的急であり、竪穴状になっている。遺構内に堆積した埋土は基本的に3層であった。茶褐色砂質土層③は遺構内に最初に堆積した埋土であり、その上に黒褐色砂質土層②が堆積し、更に黒茶色砂質土層①が堆積していた。遺物は出土していない。

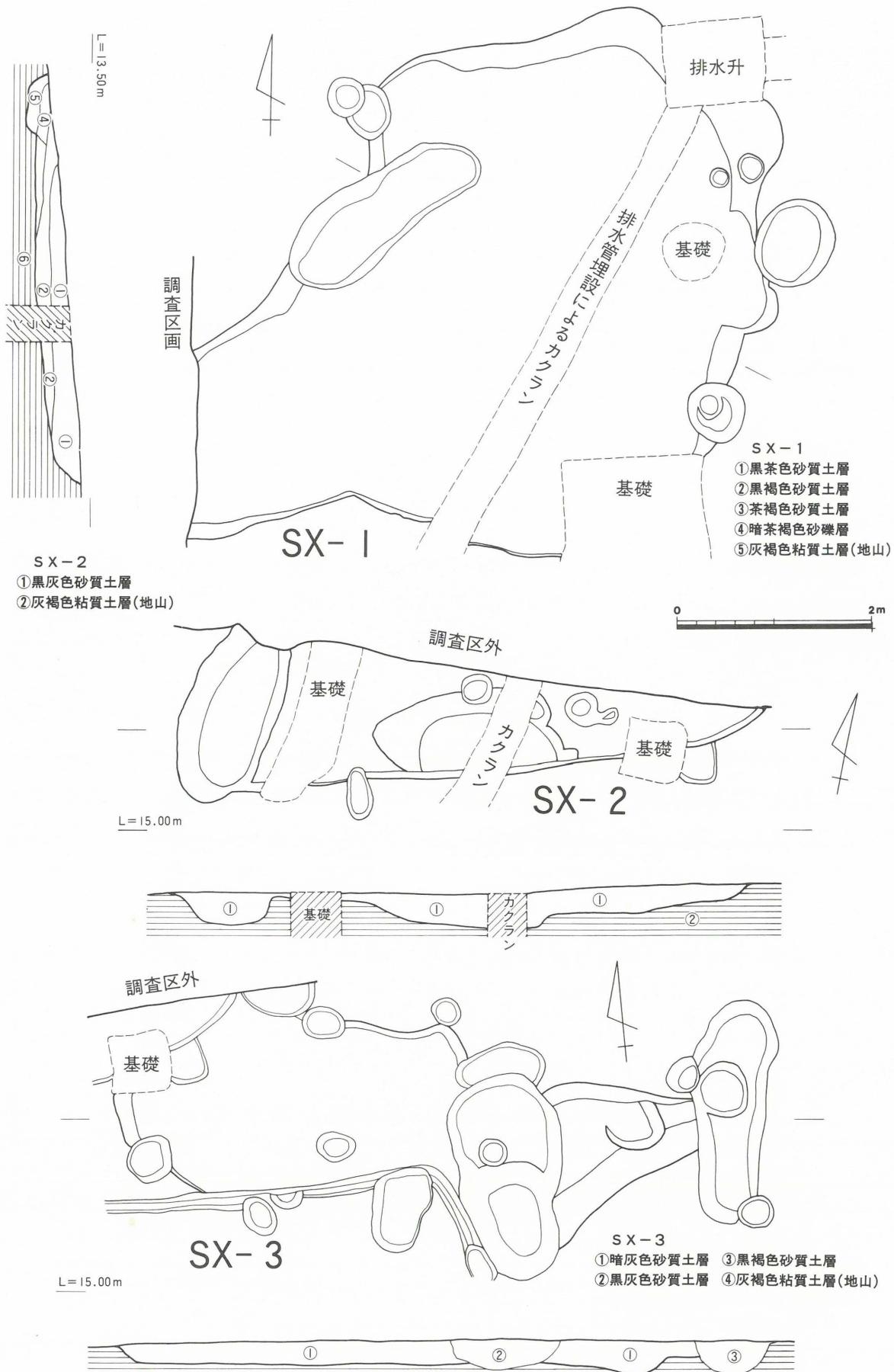
S X - 2 (第12図)

径4m以上の遺構で、北側が調査区外のため平面形及び規模は不明である。また、基礎などで撹乱されており、遺存状況はあまり良好ではない。遺構は平均10cm前後の竪穴状遺構の西側（長径1.28m以上、深さ31cmの楕円形土壙）及び南側中央（長径1.2m、深さ20cmの楕円形土壙）に2基の土壙が伴っている。埋土は、基本的には黒灰色砂質土層①の1層であった。遺物は古墳時代の土師器片が僅かに出土している。

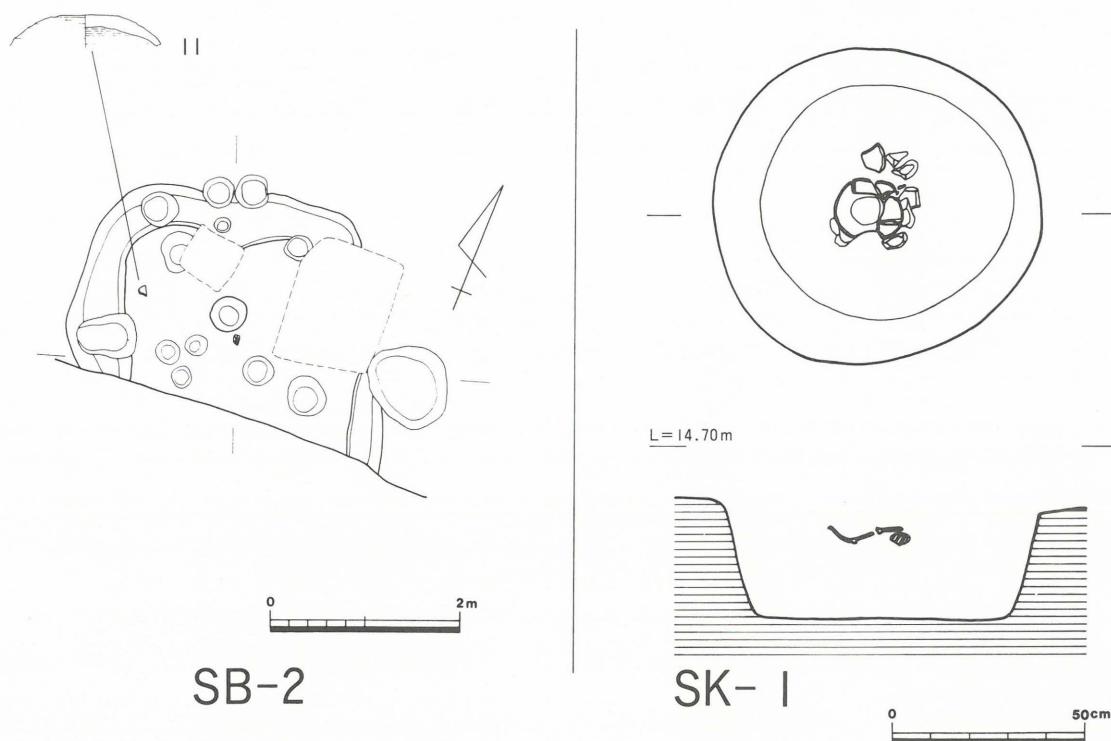
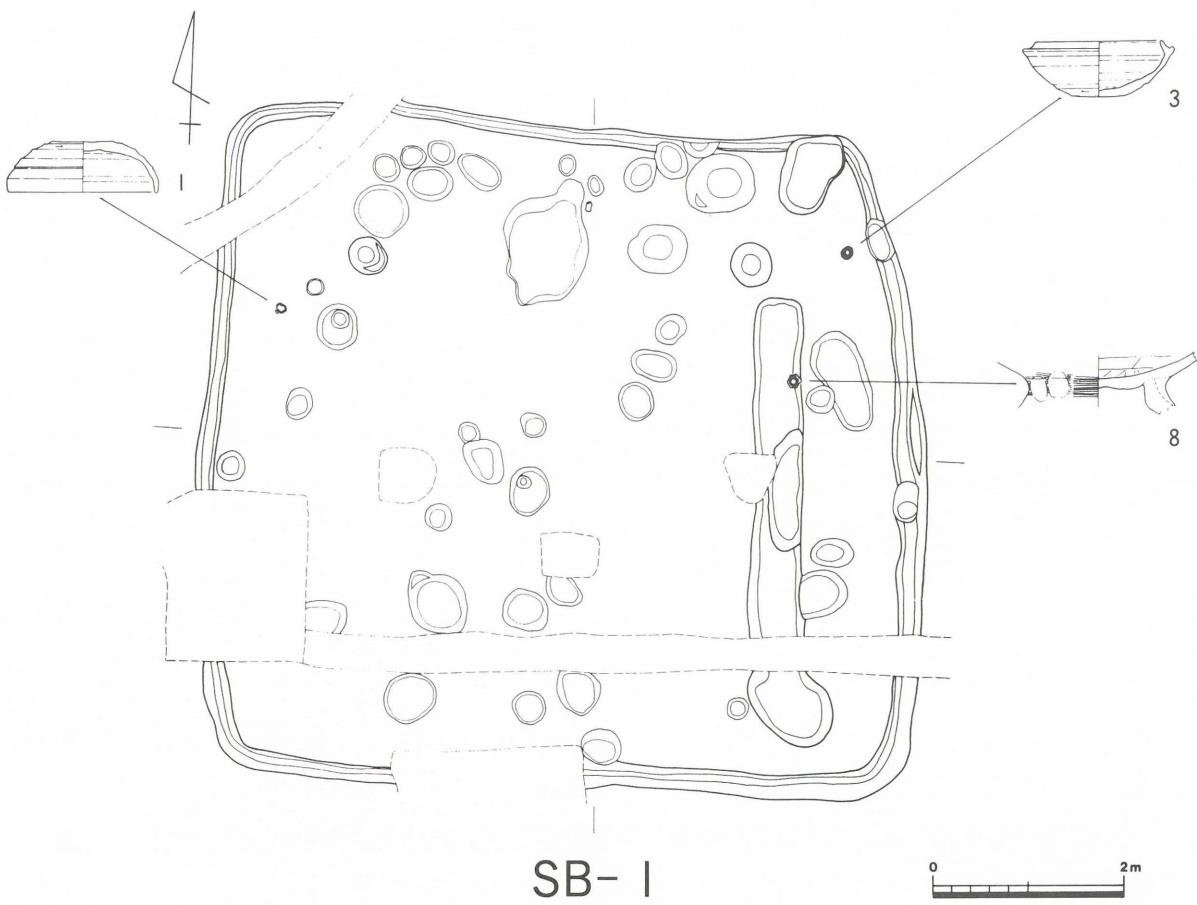
S X - 3 (第12図)

長径4m以上、短径1m以上の帶状をなすと思われ、比較的フラットに広がり深さは22cmを測る。S B - 1、S K - 14・15等によって壊されているが、遺存状況は比較的良好である。遺構東側に径40cmの土壙状の凹みがみられる。遺構の埋土は基本的には暗灰色砂質土層①の1層であった。遺物は古墳時代と思われる土師器片が若干みられる。

S X - 2・3はS B - 1に壊されており、6世紀後半より古いものと考えられる。S X - 1も同様な時期であろう。ただ、これらの遺構の性格は全くわからないが、共通しているのは形態が竪穴状であり、埋土が黒色系の色調であるということである。



第12図 S X 平面図・断面図 (1/60)



第13図 遺物出土状況図 (1/80・1/20)

第4章 遺物

出土した遺物は、コンテナ（34cm×54cm×20cm）1箱未満と量は少ないが、大半はSB-1のものであった。ここでは出土遺物を遺構毎に分け、竪穴住居址（SB）、土壙（SK）、表土、試掘の順番で説明する。

SB-1（第14図1～10）

1・2は須恵器の坏蓋である。1は口径が小さく天井部は半球形を呈し、最上部は平坦である。天井部の1／3は回転ヘラケズリが施されている。口縁端部は丸く仕上げられ、口縁部と天井部とは鈍い稜で分けられる。2は天井部を欠損している。1より口径が大きく、口縁端部は丸く、僅かに外方に曲げられる。口縁部と天井部とは稜で分けられる。

3・4は須恵器の坏身である。3は口径が小さく、立ち上がりは短く、斜め上方に直線的に伸び、口縁端部はやや尖りぎみに丸く仕上げている。底部は半円形で、約1／4に回転ヘラケズリが施される。4は3より口径が大きく、偏平である。立ち上がりは短く、斜め上方に直線的に伸び、口縁端部はやや尖りぎみに丸く仕上げている。底部は偏平な半円形で、約1／4に回転ヘラケズリが施される。

5・6は須恵器の盤である。5は口縁部がやや外方に立ち上がり、体部で屈曲するタイプの盤で、口縁端部は丸い。6はワイングラス状の盤の体部破片と思われる。

7は瓶類の口縁部破片と考えられ、外反する口縁部の端部に面をもち、断面は三角形を呈す。

8は土師器の台付甕の台部及び体部の接続部破片で、外面はハケメと指オサエが、内面は板ナデ調整がされている。大型品である。

9は土師器の甕の口縁部破片で、口縁部は強く外反し、端部は丸い。

10は土師器の壺の頸部破片で、頸部は段状になり、ハケメ調整がされている。

SB-1からはこの他に土師器・高坏の脚部破片が認められたが、細片のため図示していない。

SB-2（第14図11）

11は須恵器の坏蓋の天井部破片である。口縁部を欠損し体部のみが残存している。天井部は半球形に近く、最上部は平坦である。天井部の1／4は回転ヘラケズリが施されている。

SK-1（第14図12～14）

12は須恵器の坏蓋の天井部破片である。口縁部を欠損し体部のみが残存している。天井部は半球形に近く、最上部は平坦である。天井部の1／4は回転ヘラケズリが施されている。

13・14は中世陶器の碗である。13は器形は口縁部が緩やかに内湾し、端部付近でやや外方に開く。高台は低く偏平で、接地面は幅広い。調整は内外面ロクロナデ、底部は不明である。14は口縁部のみで底部を欠損している。口縁部は緩やかに内湾し、端部付近でやや外方に開く。調整は内外面ロクロナデである。

SK-2 (第14図15・16)

15は須恵器の壺蓋の口縁部破片である。口縁端部は下方に屈曲し、屈曲部は若干張り出す。端部はやや尖り気味である。

16は中世陶器・碗の口縁部破片で、端部は丸い。

SK-9 (第14図17)

17は須恵器の口縁部破片であるが、器種は不明である。肥厚した口縁端部に沈線が1条施されている。

SK-10 (第14図18)

18は土師器の甌把手部である。把手部は上方に曲げられ、指オサエによる整形がされている。

SK-11 (第14図19・20)

19は土師器の壺の口縁部破片であり、口縁部は外反し、端部は細く尖る。

20は中世陶器の碗の口縁部破片で、端部は丸い。

表土 (第14図21~24)

21は須恵器の提瓶体部破片である。調整はカキメとタタキである。

22は中世陶器の碗である。口縁部が緩やかに内湾するが、端部付近でやや外方に開かない。端部は丸い。内外面ロクロナデである。

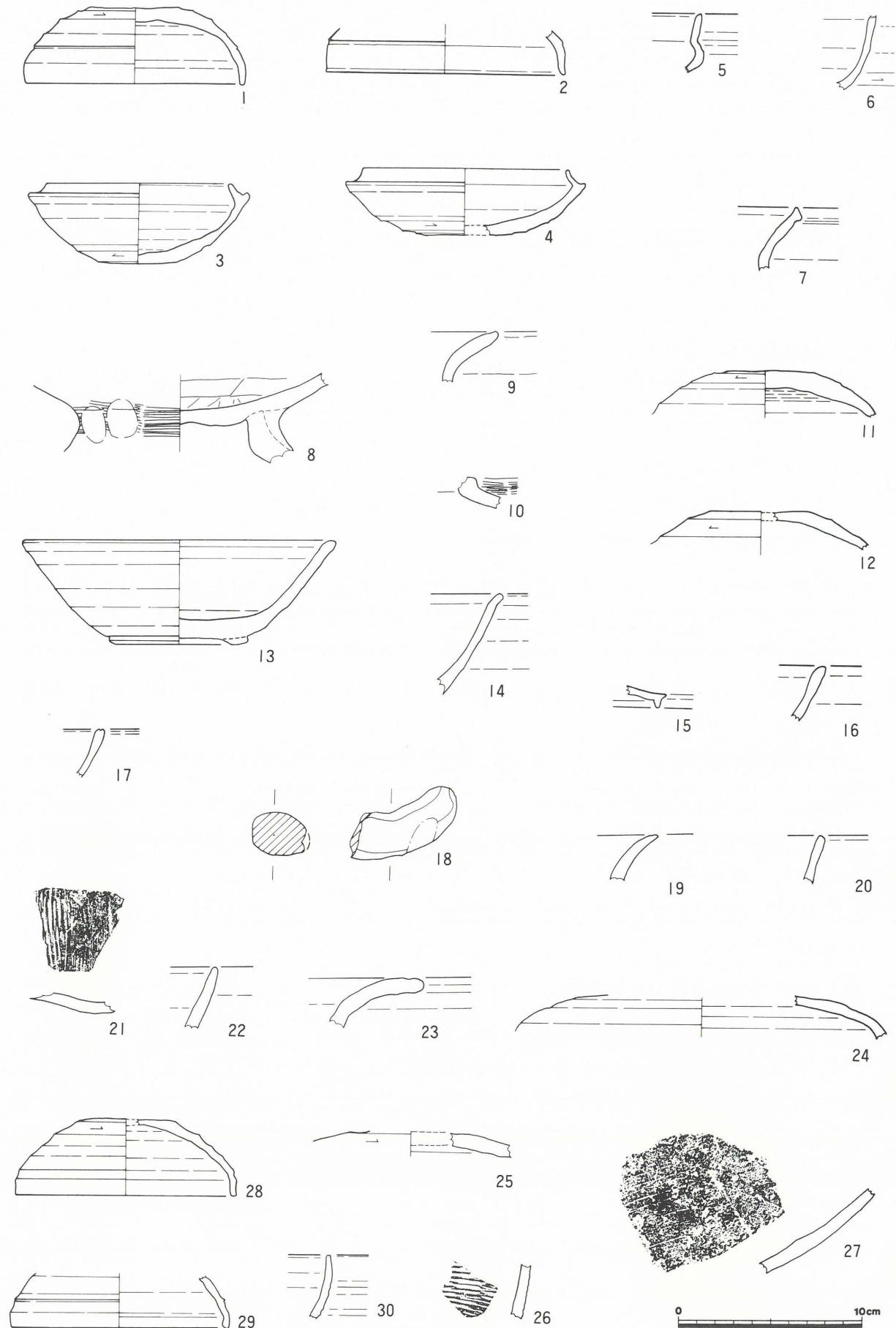
23は中世陶器の甌の口縁部破片である。強く外反する口縁部の端部は丸く、端部上面はナデ凹まれている。

24は中世陶器の壺の肩部破片である。頸部より上と体部を欠損している。肩部は強く張り出し、外面には自然釉が掛かっている。

試掘 (第14図)

25~27は6トレンチ出土の遺物である。25は須恵器の壺蓋の天井部破片である。口縁部を欠損し天井部のみが残存している。天井部は回転ヘラケズリが施されている。26は須恵器の甌の体部破片で、外面にはタタキがみられる。27は土師器の壺の体部破片で、外面には櫛による調整がみられる。

28~30は8トレンチ出土の遺物である。28・29は須恵器の壺蓋で、28は口径が小さく天井部は半球形を呈し、最上部は比較的平坦である。天井部の約1/3は回転ヘラケズリが施されている。口縁端部は丸く仕上げられ、口縁部と天井部とは太い沈線で分けられる。29は天井部を欠損している。口径は小さく、口縁端部は丸い。口縁部と天井部とは鈍い段で分けられる。30は須恵器の盤であり、器形はワイングラス状になると思われる。



第14図 出土遺物実測図 (1 / 3)

第2表 出土遺物観察表

遺物No.	層位・遺構	種類・器種	口径	器高	底径等	胎土	焼成	色調	調整等	備考
14- 1	S B - 1	須恵器・坏蓋	11.8	4.1		密	良好	灰白色	ロクロナデ、ヘラケズリ	
2	S B - 1	須恵器・坏蓋	14.0	(2.4)		密	良好	暗灰色	ロクロナデ	
3	S B - 1	須恵器・坏身	10.0	4.2	[12.0]	密	良好	灰白色	ロクロナデ、ヘラケズリ	
4	S B - 1	須恵器・坏身	11.0	3.6	[13.0]	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、ヘラケズリ	
5	S B - 1	須恵器・盤				密	良好	灰白色	ロクロナデ、ヘラケズリ	
6	S B - 1	須恵器・盤				密	良好	灰白色	ロクロナデ、ヘラケズリ	
7	S B - 1	須恵器・瓶類				密	良好	灰白色	ロクロナデ	
8	S B - 1	土師器・台付甕		(4.8)	11.6	やや密	良好	赤褐色	ハケメ、指オサエ、板ナデ	
9	S B - 1	土師器・甕				やや密	良好	赤褐色	ナデ	
10	S B - 1	土師器・壺				やや密	良好	淡茶褐色	外面ハケメ、内面マメツ	
11	S B - 2	須恵器・坏身		(2.5)		密	良好	暗灰色	ロクロナデ、ヘラケズリ	
12	S K - 1	須恵器・坏身		(2.0)		密	良好	灰白色	ロクロナデ、ヘラケズリ	
13	S K - 1	中世陶器・碗	17.0	5.6	7.5	密	良好	灰白色	ロクロナデ、ナデ	
14	S K - 1	中世陶器・碗				密	良好	灰白色	ロクロナデ	
15	S K - 2	須恵器・坏蓋				密	良好	灰白色	ロクロナデ	
16	S K - 2	中世陶器・碗				密	良好	灰白色	ロクロナデ	
17	S K - 9	須恵器				密	良好	灰白色	ロクロナデ	
18	S K - 10	土師器・甕				密	良好	淡赤褐色	指オサエ、ナデ	
19	S K - 11	土師器・壺				やや密	良好	赤褐色	マメツ	
20	S K - 11	中世陶器・碗				密	良好	灰白色	ロクロナデ	
21	表土	須恵器・提瓶				密	良好	灰白色	タタキ、カキメ、ナデ	
22	表土	中世陶器・碗				密	良好	灰白色	ロクロナデ	
23	表土	中世陶器・甕				密	良好	暗灰色	ロクロナデ、自然釉	
24	表土	中世陶器・壺		(2.2)	[20.2]	密	良好	灰白色	ロクロナデ、自然釉	
25	G - 6	須恵器・坏身		(1.2)		密	良好	暗灰色	ロクロナデ、ヘラケズリ	
26	G - 6	須恵器・甕				密	良好	灰白色	タタキ、ナデ	
27	G - 6	土師器・壺				密	良好	淡赤褐色	外面クシメ、内面マメツ	
28	G - 8	須恵器・坏蓋	12.0	4.1		密	良好	灰白色	ロクロナデ、ヘラケズリ	
29	G - 8	須恵器・坏蓋	11.8	(2.9)		密	良好	暗灰色	ロクロナデ	
30	G - 8	須恵器・盤				密	良	灰白色	ロクロナデ	

※口径・器高・底径の単位はcm、() は残存値、[] は最大幅

第5章　まとめ

今回の調査で、東田遺跡は古墳時代（6世紀後半～7世紀前半）と中世を中心とした集落址であることが明らかになった。ここでは、検出された遺構や遺物を検討し、遺跡の性格を簡単にまとめてみる。

検出された遺構には、竪穴住居址、掘立柱建物址、溝、土壙等があるが、伴出する遺物が細片のため、大半の正確な帰属時期は不明である。竪穴住居址のSB-1は出土する須恵器の壺身・壺蓋に2タイプが認められ、東三河地域の須恵器編年（註1）の第Ⅲ期中葉（6世紀中葉）と第Ⅲ期後葉（6世紀末～7世紀初頭）に比定される。SB-1は約7.6m×7mという大規模な住居址であり、同時期の住居址が平均4～5m四方のものであることを考慮すると、大きいことが理解される。竈は破壊されていたが、焼土の分布範囲から建物北側の中央部に築かれていたことが推定される。遺物は2型式のものが出土していたが混在したものとは考え難く、SB-1は6世紀後葉から使用され、廃絶されたのは6世紀末～7世紀初頭と推定したい。

SB-2は2主柱穴の隅丸長方形の住居址と思われ、同様なタイプは見丁塚遺跡（註2）からも見つかっている。時期は、出土する須恵器・壺蓋が天井部破片であるため正確な比定は困難であるが、天井部の形態及び規模からSB-1同様、6世紀後半以降のものと思われる。

掘立柱建物址（SB-3・4）は2棟が重複して検出されている。柱穴からの遺物はSP-11以外みられず、帰属時期については不明な点が多いが、SB-4のSP-11より中世陶器・碗の口縁部破片が出土していることより、継続的に中世に建てられたものと思われる。

遺物の出土している土壙で、時期の判るものは、SK-1がいわゆる山茶碗編年（註3）の第Ⅲ段階（12世紀末葉～13世紀前葉）、SK-2は中世（12世紀～15世紀）、SK-9・10は古墳時代、SK-11は中世（12世紀～15世紀）である。

SD-1は土師器片が出土しており、古墳時代、しかもSB-1以前である。SX-1～3のうち、SX-2・3から土師器の細片が出ており、またSB-1に切られていることから古墳時代のSB-1が建てられた以前のものである。これら比較的大きな遺構は竪穴状であり、埋土が黒色系というように特徴的であるが、用途が不明である。

今回の調査では、以前に指摘（註4）されていた弥生時代中期の遺物（長床式）は出土しなかった。調査地点が台地の端部にあたるため、住居址の重複もなく、遺物も極めて少なかった。恐らく台地中央部に移行すれば弥生時代の遺構・遺物も出土する可能性は高いものと思われる。

註1 小林久彦 「第4章第1節 東三河における古墳出土須恵器の編年」 『三河考古第6号 東三河の横穴式石室 資料編』 1994

註2 豊橋市教育委員会 『豊橋市文化財調査報告書第11集 見丁塚遺跡』 1990

註3 藤澤良祐 「瀬戸古窯址群I」 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要I』 1982

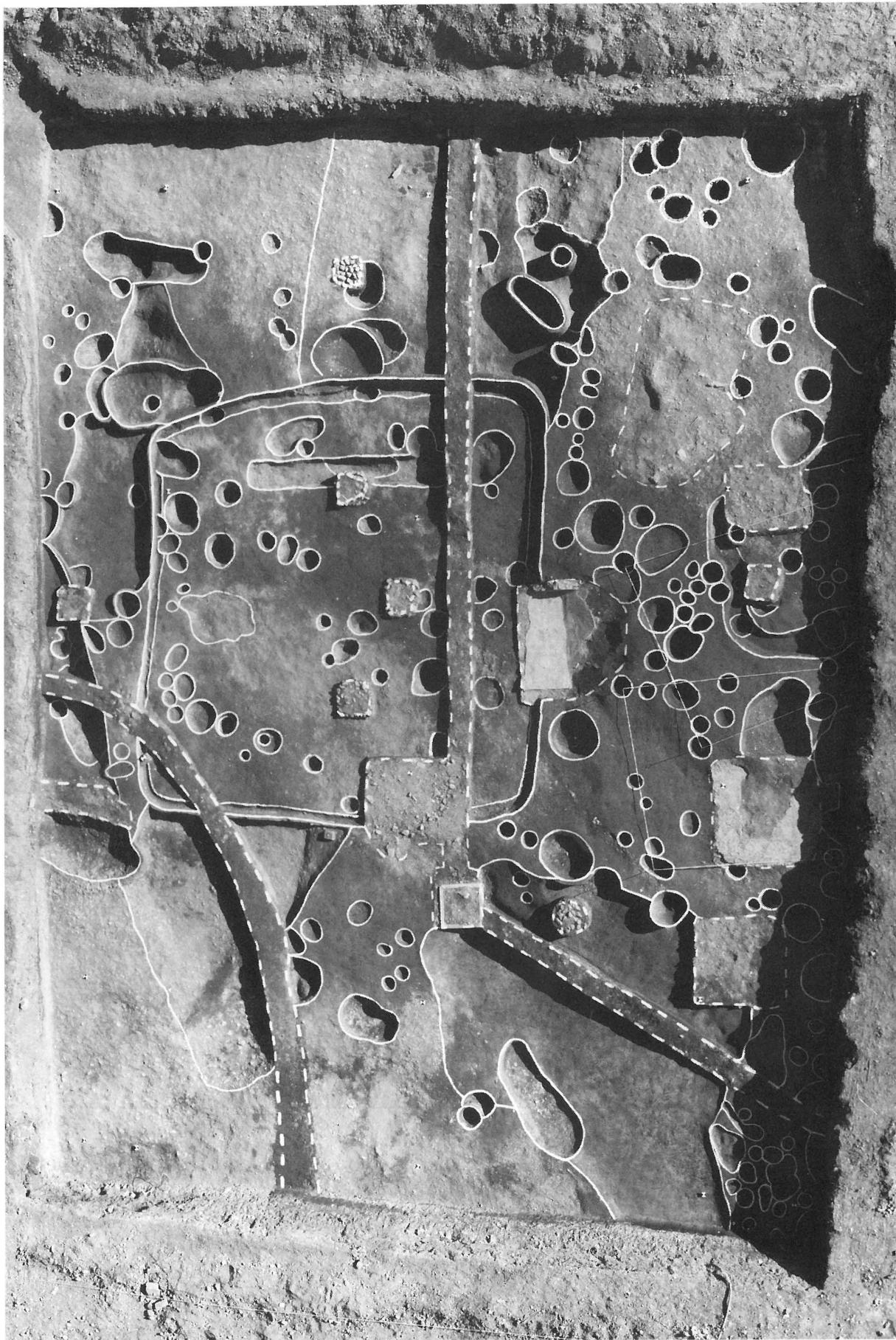
註4 木下克己 『愛知県八名郡の先史遺跡』 1975

報告書抄録

フリガナ	アズマダイセキ							
書名	東田遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第25集							
編著者名	岩瀬彰利							
編集機関	豊橋市教育委員会・豊橋遺跡調査会							
所在地	〒440 愛知県豊橋市向山大池町20-1 (豊橋市民文化会館内) TEL0532-61-5111							
発行年	西暦1995年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
アズマダ 東田	トヨハシ 豊橋市 アズマダチヨウ 東田町87番地	23201	79402	34° 46' 00"	137° 25' 10"	19950105～ 19950118	250	競輪場 メインス タンド建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東田	集落址	古墳 中世	竪穴住居址 2 掘立柱建物址 2 溝 1 土壙等	須恵器、土師器、 中世陶器等				

写 真 図 版

写真図版 1

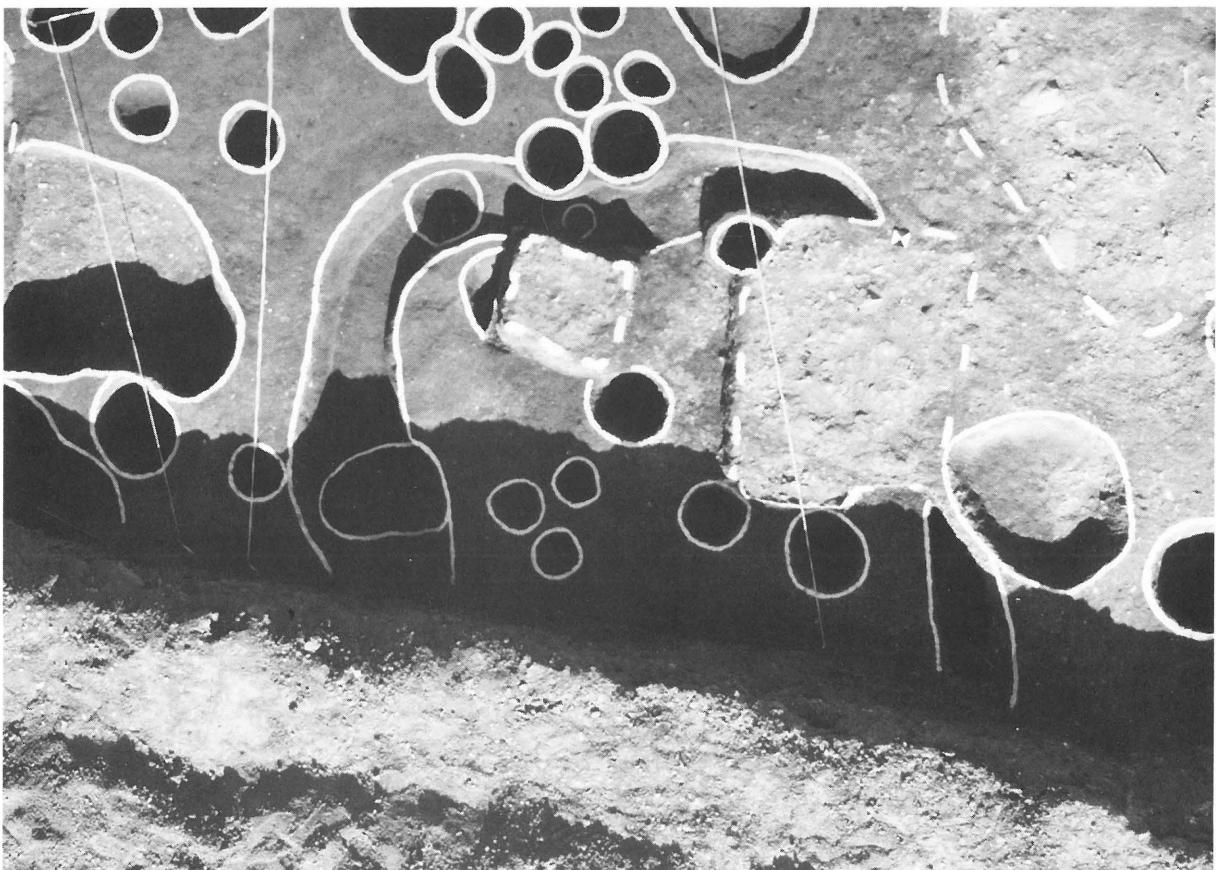


東田遺跡調査区全景（直上から）

写真図版2

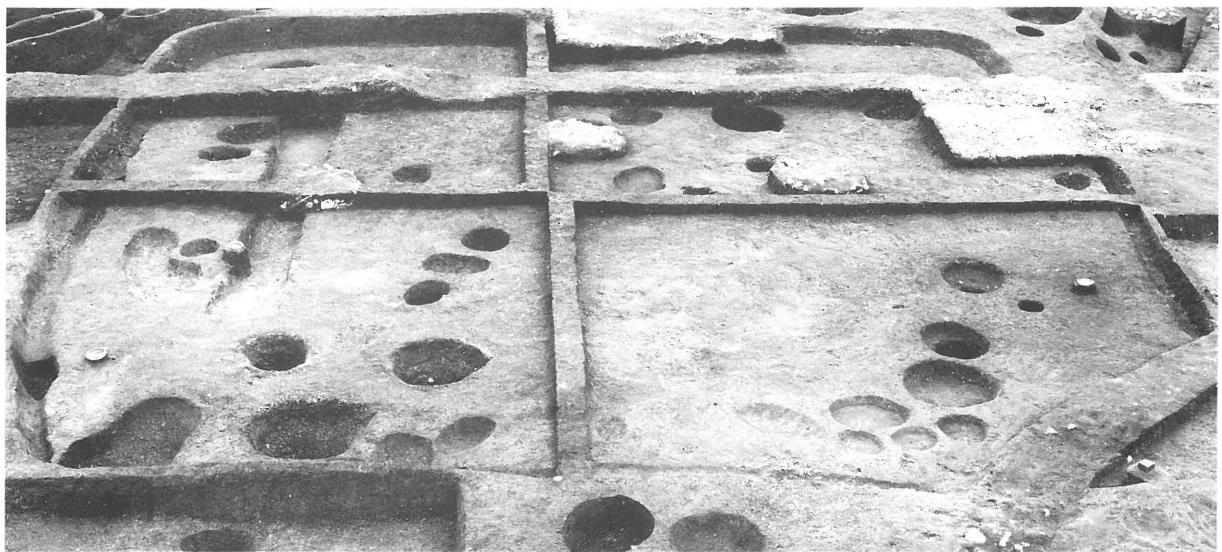


1. SB-1 全景（東から）



2. SB-2 全景（直上から）

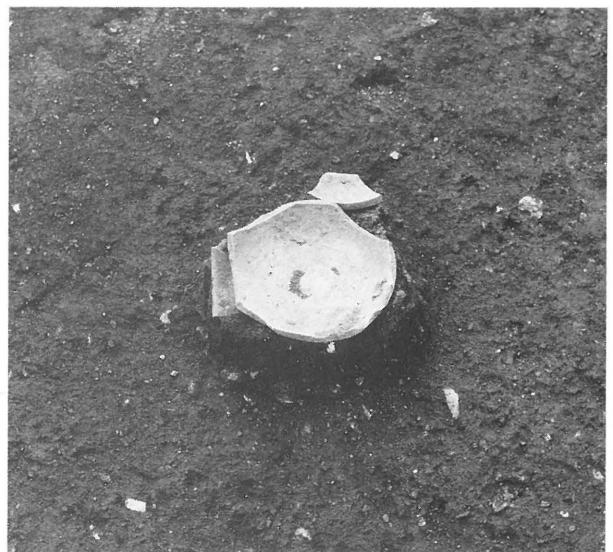
写真図版3



1. SB-1 遺物出土状況（北から）



2. SB-1 須恵器(3)出土状況（北から）



3. SB-1 須恵器(1)出土状況（北から）

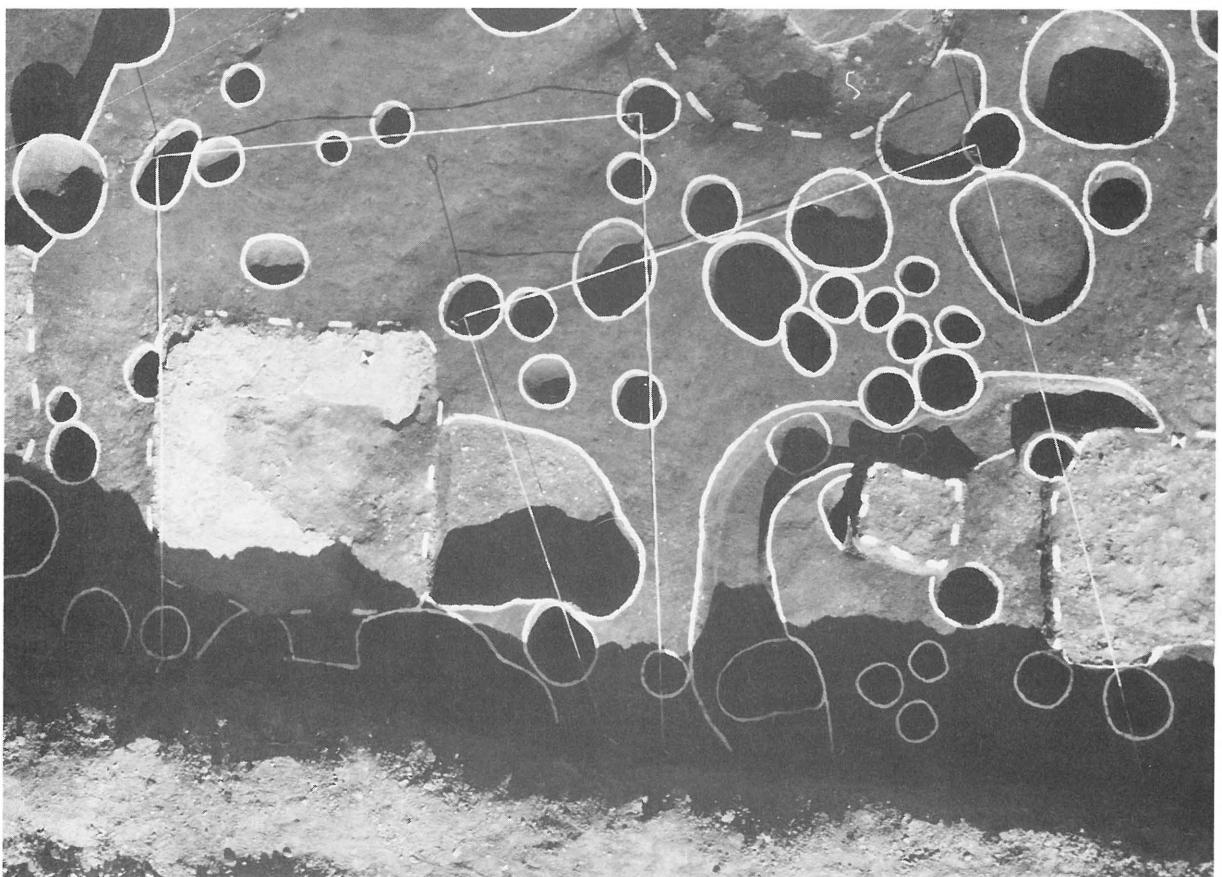


4. SB-1 土師器(8)出土状況（北から）



5. SB-2 遺物出土状況（北西から）

写真図版4

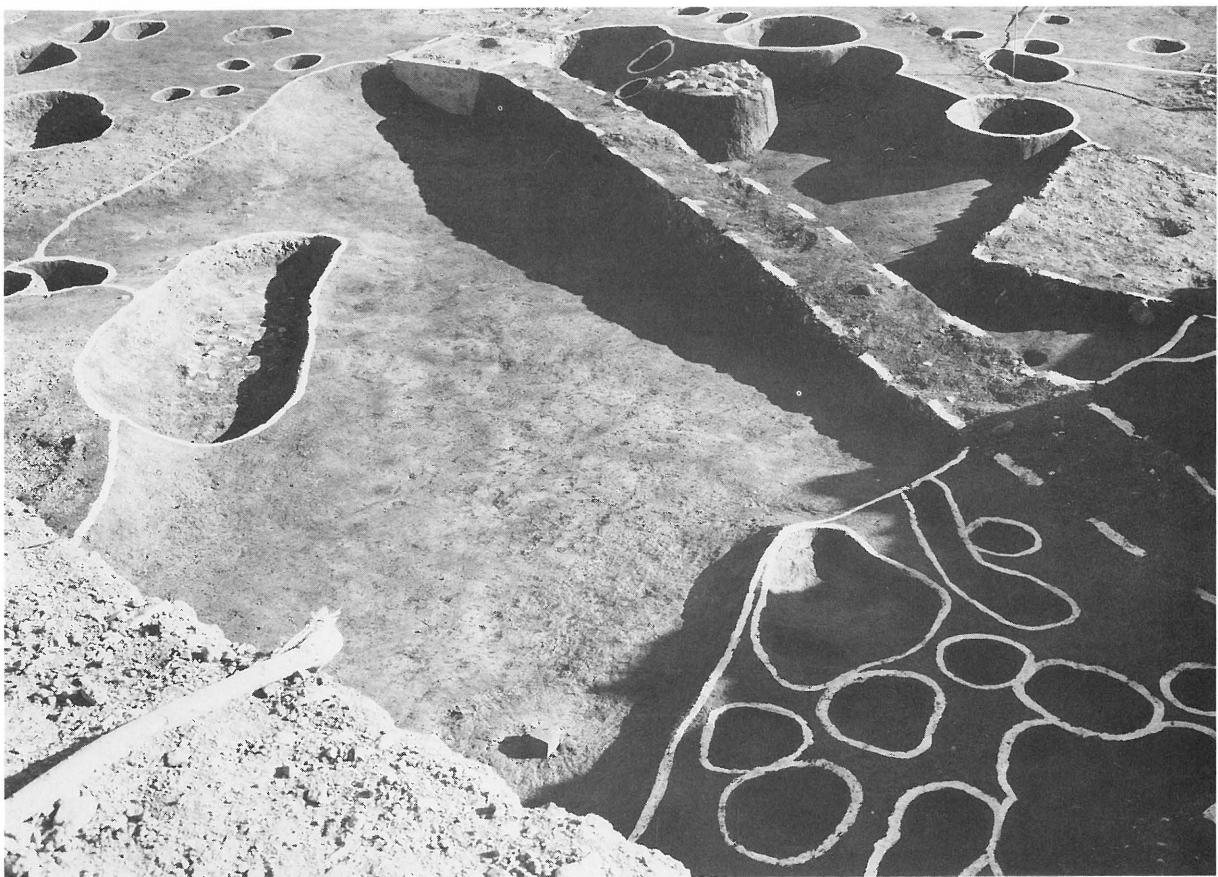


1. SB-3・4 全景（直上から）



2. SD-1 全景（西から）

写真図版5



1. SX-1 全景（南西から）



2. SX-2 全景（西から）

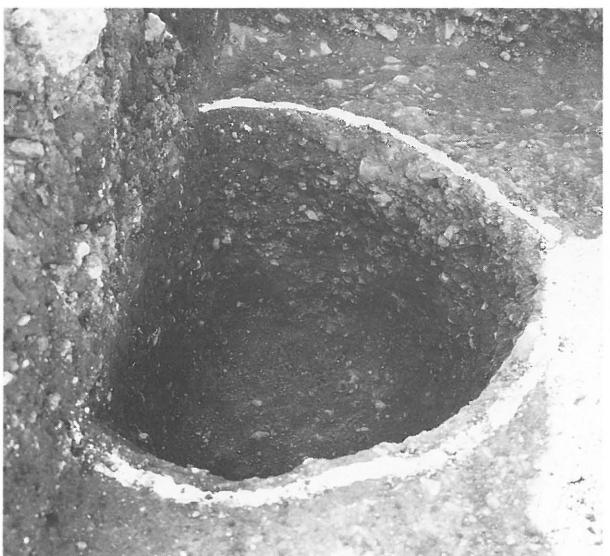
写真図版6



1. SK-1 遺物出土状況（西から）



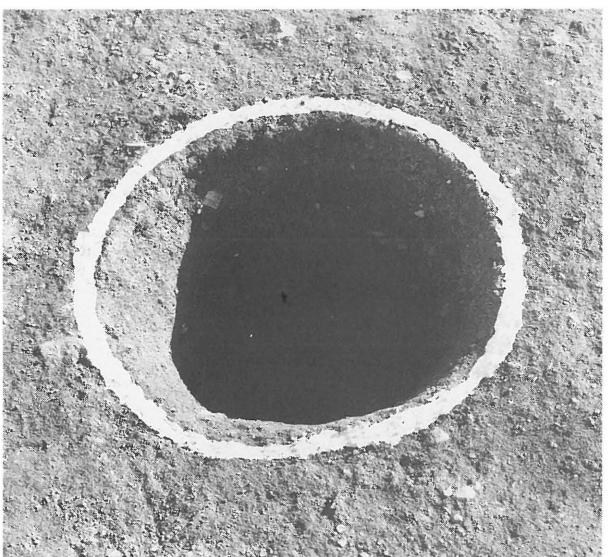
2. SK-7 (北から)



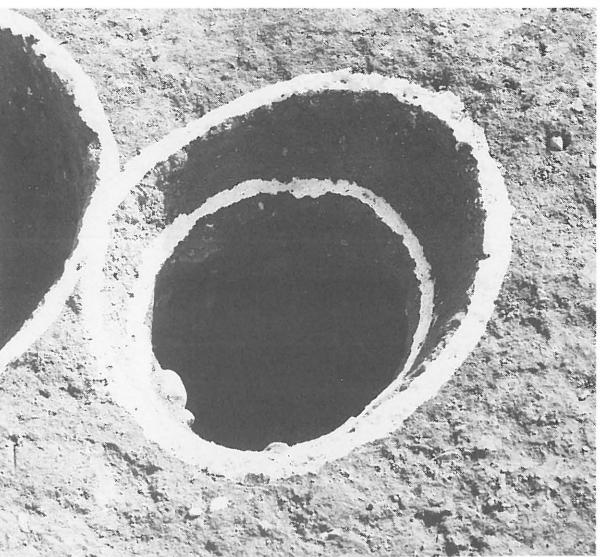
3. SK-8 (西から)



4. SK-14・15 (西から)

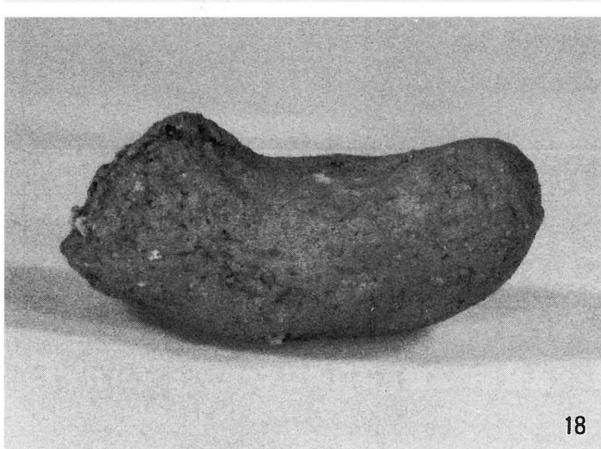
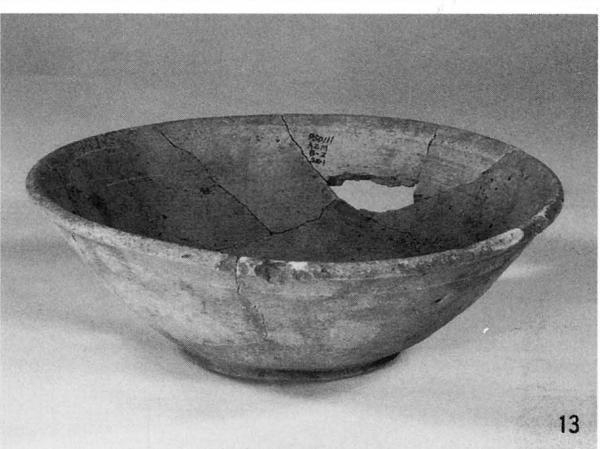
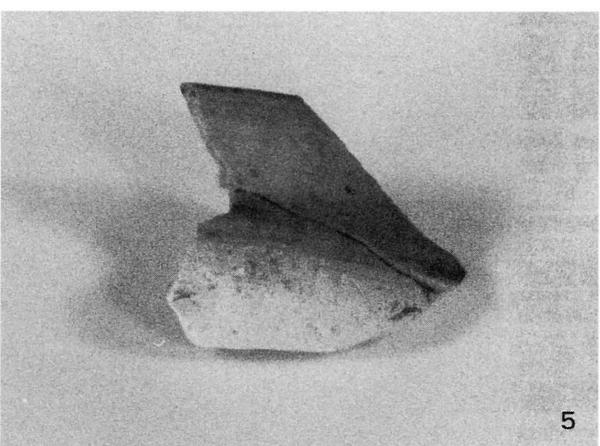
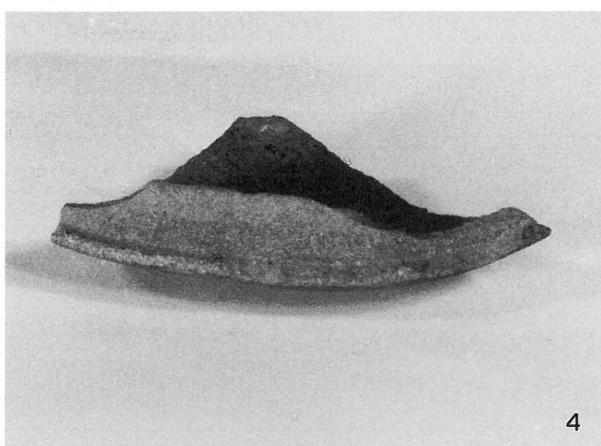


5. SP-1 (西から)



6. SP-2 (西から)

写真図版 7



豊橋市埋蔵文化財調査報告書第25集

東田遺跡

1995年3月31日

発行 豊橋市教育委員会◎

文化振興課

豊橋遺跡調査会

〒440 豊橋市向山大池町20-1

印刷 (株)豊橋印刷社